あの夏の絵

福山啓子

時　　２０１５年　五月～九月

場所　　広島県広島市　私立海陵学園高等部美術室　をメインに

登場人物

浅野恵　　一六歳高校一年
　絵が好き。祖父は既に死亡、祖母は入市被爆している。美術部員

工藤奈々（ナナ）一六歳　高校一年
　小さいころから絵が好きで、友人と遊ぶより絵を描いていた。東京から父の転勤で広島に来た。美術部員

飯島篤人（アツト）一六歳　高校一年
　中学の美術部ではマンガばかり描いていた。将来は漫画家になりたい。美術

部員。指導を聴かず自己中な絵、技術も未熟。約束を忘れたり、提出物を忘れたり。周囲の信頼ほぼゼロ。父は自衛官。

白井勝利　八五歳。
広島の被爆者。中学３年で、父親を探して市内に入った二次被爆者。戦後は砕石プラント会社の役員、子どもは２男３女。前年から証言を始める。

浅野綾子　八五歳
恵の祖母。学徒動員で地御前の兵器工場に通勤する途上被爆。

岡田路子　四〇歳　美術教師・美術部顧問。
今年初めて原爆の絵に取り組む。広島出身で叔母が被爆者。

プロローグ

舞台中央にイーゼルが一つ。周辺に石膏像や机など。
深い所で石がぶつかるような音がして照明が変化する。
舞台下手奥から綾子が登場する。それに合わせて床に同心円が浮かび上がる。中心はイーゼルの位置。綾子はゆっくりと上手から下手へ歩く。辺りを見回しながら。
綾子は下手前に座り、仏壇のりんを鳴らすしぐさ。りんの音。
恵が上手奥から登場。一瞬に明かりが変わる。

恵　おはようおばあちゃん。
綾子　ああ、おはよう。
恵　私も。（りんを鳴らして拝む仕草。音）
綾子　珍しい。
恵　今日月命日じゃろ。
綾子　覚えとったん。
恵　うん、まあ。…ほんとはお母さんに聞いた。
綾子　もう。じいちゃん泣いとるよ。恵に忘れられたーって。
恵　ごめんじいちゃん。（拝む）忘れたわけじゃないけえ。
綾子　もっとちょくちょく拝んであげなさい。
恵　はい。……あのね、…あのさ、私、（間）まあいいや。

綾子　何。
恵　いい、いい。行って来ます。
綾子　行ってらっしゃい。

恵、上手へ去る。綾子は手を合わせてから下手へ退場。

シーン1　美術室

5月末。
ナナがイーゼルを立て、パネルを置いて描き始める。パネルの後ろに隠れる感じ。
アツトが入ってきて、岡田の机で本を探す。

ナナ　先生に断ったの？
アツト　お、びっくりしたー。言えよ、いるならいるって。
ナナ　普通気が付くでしょ。
アツト　これ借りてくから岡田に言っといて。
ナナ　いや。自分で言え。
アツト　ちぇ。（メモを書く）
ナナ　どうすんのそんな本。

アツト　いいだろなんだって。
ナナ　また漫研に持ってくんでしょ。（立ち上がる）
アツト　あたり。メモ書いたからな。

アツト、出ていこうとして岡田と鉢合わせ。

アツト　おっと。ちゃーす。
岡田　あら。
ナナ　先生、飯島君が先生の本を。
岡田　「人体のデッサン」？
アツト　こういう本があるって漫研のやつらに言ったら、見たいっていうんで。いいすよね？借りても。
岡田　いいけど…（アツトを通せんぼして）ちょい待ち。飯島君が責任を持って管理してよ。その本高いんじゃけ。
アツト　うっす。（行こうとする）
岡田　まだある。課題のデッサンは？
アツト　え、あ、描きました、描きました。やべえ、鞄の中だ。漫研の部室に置いてきちゃったんで、取ってきまーす。（飛び出していく）
ナナ　いいんですか貸しちゃって。
岡田　え？

ナナ　戻ってきませんよ。
岡田　うーん。まあ催促するから。
ナナ　先生甘すぎ。あんな奴早くやめさせましょうよ。漫研と兼部なんて美術部をバカにしてるんですよ。
岡田　でも飯島君おらんと同好会として成立しないし。そうすると予算も下りないでしょ。
ナナ　うううう…。
岡田　我慢ガマン。もうちょっと部員入ると思ったんじゃけどねー。
ナナ　去年までは漫画部だったんでしょ。
岡田　まあ事実上そうだったね。びっくりした、私がこの学校におった時は美術部けっこうしっかり活動しとったのに。油絵とかガンガン描いて。
ナナ　え、先生ここの卒業生。
岡田　そうよ。中学校で美術教えてたんだけど、ここの前任の先生がやめるからって言われてエイッと転勤して戻って来たら、まるでマンガ部になっとるんじゃけー。ショックだった。
ナナ　どこもそうですよ。
岡田　そうらしいね。だから今年はマンガは漫研で、美術部は本格的に美術をやるってことにしてもらって部員募集したんだけど。
ナナ　集まったのは一年生の私と浅野さんとあいつだけ。
岡田　そう。

ナナ　がっかりしました？
岡田　そんなことないよ。優秀な人材が来てくれて感謝してます。
ナナ　えー。でもよかった。私マンガきらいなんで。絵が描きたかったから、ラッキー。
岡田　工藤さんの年代でマンガ嫌いって珍しくない？
ナナ　変わってるってよく言われます。
岡田　あ、聞いたよー、始業式の日、クラスで友達いらない宣言したんだって？
ナナ　違いますよ、絵を描いてると友達いらないくらい絵が好きですっていったんです。
岡田　そうなんだ。それにしてもすごいね。
ナナ　そうですかあ。
岡田　うん。（ナナの絵を見る）おー、だいぶ進んだね。
ナナ　グラスの光の表現がむずかしくて。
岡田　うんうん。
ナナ　どんどん変わっちゃうから。
岡田　そうそう。だから作るしかないんだよね。
ナナ　作る？
岡田　実物を参考にするけど、どこか一瞬を切り取って作っていかないと。でないと焦点がぼやけた絵になっちゃうでしょ。
ナナ　えー、むずかしー。

岡田　大丈夫、工藤さん私が高校生の時より全然うまいもん。
ナナ　そんなことないですよー。
岡田　ほんとほんと。

恵が入ってくる。

恵　先生。
岡田　こんにちは。
恵　あの、昨日のお話のことなんですけど。原爆の被爆者の証言を絵に描くって企画。あれ、私やります。
岡田　え。
ナナ　浅野さん昨日やらないって言ったじゃん。
恵　そうだけど。でも一晩考えて、やらなかったら後悔するって。だからやらせて下さい。
岡田　そう。おうちの人には相談した？
恵　母は賛成してくれました。やるからにはしっかりやりなさいって。
岡田　……。
恵　もう駄目ですか。
岡田　そうじゃなくて。えーと、まあちょっと座って。

恵座る。岡田は立ったり座ったりしつつ。

岡田　浅野さんは被爆三世だっけ。

恵　はい。祖父と祖母が被爆していて。母は違うんですけど。でも原爆のことってうちでは話さないんです。８月６日には毎年おばあちゃんがコップにお水入れて仏壇にお供えして拝んでますけど。お祖父ちゃんが死んだ時、何も話を聞かなかったことがすごく心残りで。

岡田　お祖母さんにはその後お話聞いたの？

恵　いいえ。やっぱなんか聞きづらくて。だから被爆者の方のお話を聞けて、絵を描くことで何かお手伝いできるならやりたいなって。

岡田　うんうん、そうだよね。私も平和資料館からこのお話があった時、広島の高校生にとってもめったにない機会だからぜひやったらいいと思ったんよ。新生美術部のアピールにもなるし。んー、でもね、よくよく考えてみると、すっごい大変なことだなって思ったの。よっぽどの覚悟がないと。

恵　覚悟。

岡田　うん。はっきり言って先生方の中には反対する人もおるの。

恵　なんでですか。

岡田　すごく残酷なシーンもお話の中にはいっぱい出て来るでしょ。黒焦げの死体の山とか、火傷で皮膚が垂れ下がった人とか。そういう絵を描くことでトラウマになったらどうするんだ。とか、今まで本格的な絵を描いたことのない高校一

年生がそんな難しい絵を描けるわけがないとか。しかも、いったん引き受けちゃったら絶対途中でやめることは出来ないと思うの。そんなことしたら証言者の方がすごく傷つくでしょ。

恵　……。

岡田　ぜったいやめないで最後まで描き上げる自信ある？

アツトが入って来る。

アツト　（画用紙をヒラヒラして）先生これ。あれ？

岡田　（画用紙を受け取り）岡田さんがね、被爆証言の絵に取り組みたいって。

アツト　あれ、お前昨日やらんって言っとったじゃん。

恵　……。

岡田　証言者の方の希望に沿う絵にするにはきっとうんと時間もかかると思う。いい加減な絵にはできんしね。他の授業の勉強もやりながらだから大変だし。どう？それでもやる？

恵　……やります。やりたいです。

岡田　（立ち上がって歩き回っているが）…わかった。あなたが覚悟を決めたなら私も全面的にバックアップします。なんでも相談に乗るし、資料集めには協力するから。

恵　お願いします。

アツト　なんかすげー。
岡田　よーし。じゃ校長先生にお話して、それから平和資料館に連絡してみるね。証言者の方のお話を聞く日を決めんと。どう、工藤さんは。
ナナ　え？
岡田　浅野さんが取り組むっていうんじゃけ、一緒に描いて見ん、原爆の絵。せっかく東京から広島に引っ越してきたんじゃし。
ナナ　無理無理。絶対無理です。
アツト　おれも無理だなー。
ナナ　あんたには聞いてないから。
アツト　え。
岡田　そうね。飯島君には向かないと思う。飯島君は自分の描きたいように描くタイプだからね。この絵は証言者の方の見たものをなるべく忠実に再現しないといけないでしょ。
アツト　はあ、
ナナ　課題の決まりも無視するし。忘れ物はするし。
アツト　じゃけやらんって。
岡田　でも折角だから証言者のお話はみんなで聞こうよ。
アツト・ナナ　えー。
岡田　なに。
ナナ　私は描かないんだから…。

アツト　おれ平和教育でさんざん聞いたし。忙しいし。
岡田　だめ。これは美術部の部活としてやります。こんな機会めったにないんじゃけえ。ね。（出ていく）
アツト　強引だなー。
恵　なんで聞きたくないの？二人とも。
アツト　えだって聞いたじゃろ？　平和教育で。
ナナ　平和教育って何。
アツト　え？　ほら８月６日にやるやつ。
ナナ　８月６日に何やるの？
恵　体育館に集まってお話聞くじゃろ。
ナナ　夏休みなのに？
アツト　東京は８月６日登校日じゃないの？
ナナ　うん。
恵・アツト　えー！
ナナ　なに。
恵　小学校も中学校も？
ナナ　広島はずっと登校するの？　８月６日に。
アツト　当たり前じゃろ？
ナナ　うそー。
アツト　えー。

恵　あ、じゃ一五日に登校するとか。
ナナ　八月一五日？　なんで？
恵　終戦記念日。
ナナ　何それ。
アツト　お前馬鹿か。
ナナ　あんたに言われたくない。
アツト　馬鹿じゃろ。なんで終戦記念日も知らんのん。
ナナ　え何しゅうせんって。
恵　第二次世界大戦が終わった日。
ナナ　あー。
アツト　あーじゃねえよ。お前まさか、八月六日何の日か知っとるよな？
ナナ　広島に、…原爆が、落ちた日？
恵　当たり。
ナナ　イエーィ（Vサイン）
アツト　その位常識だろ。
ナナ　感じ悪ーい。
恵　でも私も聞いた、クラスの子が中学校岡山県で、社会の時間に先生が八月六日は何の日ですかって聞いたら誰も知らんかったって。
アツト　マジかよ。
ナナ　でしょ、普通知らないよ。

アツト　普通じゃねえよ。
ナナ　広島が特別なの。何八月六日わざわざ学校に来るんだ。
恵　そう。それで被爆者の方のお話聞いたり。
ナナ　へー。
アツト　お前聞いたことないの？　被爆者の話とか。
ナナ　ない。
アツト　えー…。
恵　アニメとかは？　「はだしのゲン」とか。
ナナ　あー、「はだしのゲン」、あったあった図書館に。
アツト　あれは強烈だよなー。ガラスグサグサー、皮膚ダラーンとかさ、エグイけど読み始めると止まんねえし。読んだろ。
恵　私は二巻くらいまでかな…。工藤さんは？
ナナ　読んでない。マンガ嫌いだもん。
アツト　読めよ「はだしのゲン」くらい。
ナナ　うるさい。
アツト　その調子じゃ誰が原爆落としたかも知らねえんだろ。
ナナ　知ってるよそれぐらい。ヒットラーでしょ。
恵・アツト　（絶句）
ナナ　え、違った？　え、誰？
アツト　アメリカだよー！

ナナ　ウソ。
アツト　嘘じゃねえよ！
ナナ　だってアメリカ仲いいじゃん日本と。
アツト　そん時は悪かったの！
ナナ　なによ二人して馬鹿にして。
恵　バカにしてない、バカにしてない。びっくりしただけ。
アツト　お前社会科で何勉強してきたんだよ。
ナナ　寝てたもん。だってすごい嫌な奴だったんだよ、社会のセンコー。女子が着替えしてる時間違えたふりしてドア開けたりしてさ。
恵　やだー。
ナナ　でっしょー。
アツト　それとこれとは別だろ！
ナナ　何が別よ！
アツト　もういいもういい。
ナナ　んもー、むかつくー。
恵　うん、でも、いい機会だから、ほんと、一緒にお話聞こうよ。ね。
ナナ　えー、やだなグロい話。
恵　とにかく、一っ生に一度くらいは、聞いてもいいと思うよ。
ナナ　んー。

岡田が入って来る。

岡田　連絡取れたよ。白井勝利さんて方が来てくれることになった。来週の月曜日がいいって…あれ、どうかした？

恵　いえ、有難うございます。お話、聞きます三人で。

ナナとアツトは恵をうらめしそうに見る。

シーン2　美術室

6月始め。岡田に伴われて白井が来ている。

白井　白井勝利といいます。よろしくお願いします。

恵　よろしくお願いします。浅野恵です。

ナナ　工藤奈々です。

アツト　飯島篤人です。

白井　ほお、三人も描いて下さるんですか。

岡田　いえ、描くのはこの子だけなんです。でもお話はみんなで伺いたいと思って。

白井　皆さん美術部。

岡田　そうです。どうぞお座りください。

白井　あ、どうも。（一同座る）そうですか。いやー、ありがたいのう。実は私はね、証言活動を始めてまだあまりたっとらんのですよ。

岡田　いつから証言を始められたんですか？

白井　去年です。去年からぼつぼつね。だから話がとっちらかって、あちゃこちゃするかもわからんですが、勘弁して下さい。

岡田　いえ、それはもう、お話伺えるだけでも。（以下の会話の間に茶をいれて出す）

白井　ちょっとこうメモは作ってきたんですが…。浅野さんていったかね。

恵　はい。

白井　一年生。

恵　はい。

白井　はあ。うーん。私はね、資料館からこのお話を伺って、証言を絵にして下さるという。もう飛びついたんですよ。小学生なんかは話だけではよう伝わらんので、絵があったらええじゃろうなーとずっと思っとったんです。それにわしらはもう年じゃけ、じきにあっちへいってしまうんじゃけ、そうするともう原爆のことを覚えとるもんがおらんようになるじゃろ。でも絵があればね、記憶が残る訳だから、こりゃあええと思うてね。でもこうしてお会いしてみると、まあ可愛らしいお嬢さんで、原爆の絵なんて残酷なものを描かしてもええんか、ねえ。

恵　いえ、描かせて下さい。お願いします。

岡田　浅野さん被爆三世なんですよ。

白井　ほうね。
恵　はい。祖父と祖母が被爆しています。祖父は去年亡くなったんですけれど、原爆のことは何も聞かないままで、すごく後悔したので。
白井　いくつで亡くなられた。
恵　八四です。
白井　ありゃ。ほいじゃあわしと同い年じゃ。こりゃあ何かご縁があるんじゃのう。
岡田　そうですね。
白井　ほいじゃあ聞いてもらおうかのう。なんかわからんことがあったら途中でもええけえ質問して下さい。
恵　はい。
白井　えーと、どっから話すか。（メモを見つつ）一九四五年。んー、やっぱり当時の時代背景から話した方がええかな。ええですかこういう話して。
岡田　どうぞどうぞ。
白井　えー、私ら子どもの頃はねえ、本当にもう戦争一色いう時代だったんですよ。日中戦争から大東亜戦争、第二次世界大戦のことね。私らが小学五年生の時に大東亜戦争が始まった訳ですから。男は全て召集令状で戦地に行く。残ったんは年寄、女、子どもです。全部田んぼも、男仕事というのは全部女がやる。ほいから年取ってどうしようもないようなじいさんばあさん、そいから子どもまで全部手伝う。そういう時代の中で育ったわけ。
まあ大東亜戦争が始まりましたらね、国家総動員法いうのが出来まして、ほい

から物資統制令というのが出て来まして、米麦砂糖、マッチ、衣類に至るまで全部配給制度。

恵　配給制度てなんですか。

白井　うん、御金があっても品物を自由に買えないんです。家族分の切符を買って、それと交換で食料やなんやらを配給所で受け取るわけ。ところが戦争の終わりころは切符があっても物がなくなって、なにも手に入らない。「欲しがりません勝つまでは」なんてスローガンが出来て本当に辛抱して生活をずーっとやってきました。まあ、ねえ、政府に対する批判も一切できませんしねえ。まあひどい時代だったですよ。

岡田　当時の広島ってどんな感じでしたか。

白井　あのー当時広島はね、本当に軍人の街で、広島城が師団司令部でね、ここに一一連隊いう大きな連隊がありまして、五万人を超える兵隊が広島に皆寄っとったわけです。宇品に軍港がありましてね、全国から兵隊さんが寄って来て、宇品から戦地に出る。ほいから戦地からは負傷兵やなんかがどんどん送り返される。そういう状態。

　それで、六年生になって広島へね。私、下蒲刈島いう小さい島の出身なんで、宇品に叔父がおってですね、叔父貴の所にお世話になって、広島の誠心中学に入ったんです。

アツト　おー、名門。

白井　や、あの当時はね、勉強よりも軍事教練でオイッチニオイッチニばっかりでし

ょ。じゃからわしが誠心に入ったのもね、どうもね、成績よりもね、力があったから。というのは、土俵をポーンと担いでね、走らされたんですよ。

アツト　え、入試で。

白井　そうそう。

アツト　すげー。（笑）

白井　子どもの頃から島の蜜柑畑の手伝いやらされて、山の急な坂道をね、上がったり下がったり、一日に何べんも。つきますよ力が。町の人間のひょろひょろと全然違う。ほじゃけ一発じゃなかったかな。頭じゃないね。（笑）

ナナ　（恵に）軍事教練て何。

白井　要するに兵隊さんになる訓練。学校の授業の三分の二は訓練。鉄砲で撃つ練習をする。

アツト　本物の銃で。

白井　ほうよ。実際に発射はしないけど、手入れや構えを練習しました。本物だから重いんですよ。それを担いで朝から、三時間位広島市内をオイッチニオイッチニと走らされる。もう一年生から毎日そればかりでね。グズグズしとったら教官に蹴っ飛ばされる。で、えー、中学二年生になって、学徒動員令が出まして、当時広島には無数に軍需工場がありましたから、二年生以上は全部そういうところへ配属される。私は兵器廠に配属されました。今の広島大学の医学部のところにあったんですがね、ずーっと高い土手が縦横にありましてね、中には弾薬やら兵器を運ぶ線路が走っとりましてね。で、倉庫から、弾を。まだ二年生

よ、中学の。

アツト　弾。

白井　弾薬よ。直径が7、８０センチ、長さは2メートルもある大きな弾薬。それがずーっと山積みに積んであるんで、それをイッチニで下ろして、トロッコに積んで。ほいからトラックに積んで送り出す、そういう作業しとったわけですよ。

アツト　怖えー。

白井　ほいから四月になって三年生になりましてね、私らはあの、宮島の裏に包が浦いう、今海水浴場になっとるところに大きな陸軍火薬庫があったんですよ。そこへ配属になりました。

岡田　包が浦知ってます！　今キャンプ場ありますよね。子ども連れて行ったことあります。あそこに弾薬庫があったんですか？

白井　そうそう。陸軍火薬庫。弾に火薬を充填するところなんです。

岡田　知らんかったー、えー。

ナナ　（恵に）宮島て厳島神社のとこ？

白井　そうそう。（身振りで）こう広島湾があって、あっちが広島、宮島がここで、厳島神社はあっち、包が浦はこの広島寄りのはしっこのとこね。ここから山越えたところに杉之浦いう小さい部落がありまして、そこの宿舎で寝泊まりして毎日工場に通っておったんです。

８月６日の話になると、同心円が表れる。

白井

ちょうど八月六日の、原爆投下のその日ですが、杉之浦の宿舎から山を越えて８時までに現場に入りまして、集合して、点呼をして、作業指示をして、作業場に入った。そん時ですよ。ピカーっと光りましてね、ドカーンときたわけですよ。こらやられたー！　自分らは火薬庫ですから、火薬庫が爆発した―っと思ったわけですよ。こりゃあ大変だあ、わしは死ぬるわー思うた。兵隊が「すぐ避難せー！」っておらぶんですよね。皆大きい防空壕へパーッと駆け込んだ。しばらくそこへ待機しとったんですが、兵隊がガタガタ走っとって、火薬庫ではない、「広島が！　やられたらしい」という情報が入ってきて、防空壕から出ました。

　ほいたらねえ、包が浦いうとこはね、広島から海を隔てて真向いなんですよ。その間には海だけで何にも無いんで。６，７キロ離れとるかな。その広島の上空に、入道雲がね、始めこんなだったのがウワッウワッモクモクと、中心の方はちょっと黄味がかったような、恐ろしいような、ウオーウオーウオーウオーと空一杯に広がるんですよね。「ふえー！　こりゃ大変なことじゃ、どうなったー」と。分かりませんからね、原子爆弾とかそういうことは。そうこうしとるうちに広島の上空は白い煙でぶえーっと覆われる。火事になっとるわけですよ。「お前らは宿舎へ帰れ―！」いうことで、すぐに宿舎へ帰りました。

　ほいで宿舎で待機して夕方になったら、浜辺ですから宿舎が、「人が流れとるぞー！」ゆうもんじゃから、私らもだーっと出たわけですよ。ほうしたらね、

真っ黒になった人が流れてくる。私のイメージに残っとるのがね、もんぺ姿の女学生が、頭は焼けただれて髪はどうにもならんようになっとる、もんぺは焼けただれてね、一番頭に残っとるのが、

この話の間に岡田はナナの反応を見てナナに寄り添う。

白井

ここの陰部の所からね、蛆が湧いとるんですよ、もう。その日の晩でしょ。もうそういう状態ですよ。みんなもう震えたですよ見に行って。

夜になって広島の方見ましたらね、空が真っ赤ですよ全体が。ほうしたら兵隊が来て、「広島のものは三日間猶予をやる。明日船で宇品へ連れて帰るから用意せい」と言われて。翌日宇品の港に運ばれて、叔父の家に帰りました。

ついてすぐ、親父を探しに行きました。親父は陸軍の上等兵で、広島城の近くの西練兵場におったはずじゃけとにかく行くだけ行ってみようういうて叔父と二人で市内に入ったんですよ。京橋川を渡ったらもう全部焼野原。何もない。山が見えるだけで。まあポツンポツンと焼けたビルが、百貨店の福屋とか、中国新聞とかが残っとるだけ。全部すごい残骸でボーボー燃えて煙が立ち上る中を入っていったんです。電車道はなんとか歩けたから。

もう川に人が流れとったし、橋のふもとには水を求めて入った人の死体が重なっとるし。で、練兵場に入ったんですが、もう修羅場で。兵隊があっちにもこっちにも穴を掘って死体を投げて、油をかけて焼いて、焼け瓦をずーっと並べて、

そこに骨を並べておりました。そういうのを全部見て回ったんですが、通行止めのところも多いし、いったん家へ帰りました。そしてあくる日母親が島から来るのを待って三人でまた探しにいきました。

福屋が収容所になっとるいうのを聞いてそこへ行ってみた。焼けたビルの中にずらーっと並んで寝かされとる中を見て回ったがおらん。その時にね、壁に寄りかかって座っとる少年がおってね、バーッと目があってにらみつけられた。良く見るとね、片目だけ開いて、片目は潰れてしもうとる。はあ死んどるんですよ。目が光っとったけ、生きとる思うたんじゃけどね。それが非常に印象に残ってね。今でも夢に見ることがある。ええ。

三日目に、陸軍病院の分室が宮島の近くの大野町の大野西小学校にできたいうて聞いてそこへ行ったんです。

ほしたらね、大野の小学校の講堂で、毛布が敷いてあって、兵隊やら一般の人やなんか一杯ころがっとりまして。そこん中を母親と叔父と一緒にずーっとこう歩いていったんですが、さっぱり私にはわからない。みな怪我して見分けがつかんようになっとりますから。ほいたら「勝利―、勝利―」いうて呼ぶんですよ。「あれ、親父じゃー」いうことで、ほれでね、大野の小学校で親父見つけたんですよ。

間。同心円は消える。アツトが立ち上がって少し離れた所へ行く。

岡田　うーん。

白井　親父は火傷はあったんじゃけど、それよりも額がバーッと縦に割れてね。ほいから毛が抜けて、歯も抜けとる状態だったもんだから、わからんかったんですねえ。それから私は、三日の猶予ギリギリだったんで、父のことは母と叔父に任せて包が浦に帰りまして、八月一五日に玉音放送を聞くまで火薬庫で作業をしとりました。

アツト　お父さん助かったんですか。

白井　うん、助かりました。宇品の陸軍の仮収容所へね、連れて来て。叔父の家も近いし、港が近いから郷里の島から食料を運んで、それで弁当作って毎日持って行ってやってね。最後は原爆病院で亡くなりましたが、昭和三六年まで生きて、初孫の顔見るまでは頑張ってくれました。

岡田　そうだったんですか。でもよかったですねえ、見つかって。

白井　奇跡みたいなもん。本当にね。いや、長々と話してしもうて。

岡田　いえいえ、思い出すのもつらいお話を、ありがとうございました本当に。でも、こうして少人数でお話聞くと全然違いますね。ものすごいリアルというか。大勢で聞くのと印象が全然。ねえ。

恵　はい。それはもうほんとに。

白井　ほうですか。

恵　小学校中学校では生生しいこととかまったく聞かなかったので。すごく身近に感じました。

岡田　そうだねえ。
恵　知らないことがいっぱいあって。
白井　そう言っていただければありがたいです。
岡田　浅野さん、どう、描きたい場面あった？
恵　福屋の少年の話が。
岡田　あー。
恵　睨まれたと思ったのに、もう死んでいたというのが、すごく印象に残ったので。
白井　ああ、あの少年の。そうですか。
恵　あの、お願いがあるんですけど。
白井　はい。
恵　その時の場面を、ざっとでいいんで描いてもらえませんか？
白井　え、わしが描くんかいの。
恵　人物の配置とか、簡単でいいんです。
白井　ほうですか、じゃあ…何か紙がありますか。

恵と岡田、紙やら鉛筆やらを差し出し白井の隣に立つ。ナナは次の話の間に自分の絵の方へ行って座る。アツトは近寄って白井の絵を見る。

白井　壁がこうあって、その前に少年が座っとったですね。奥の部屋にずーっと並んでこう寝とったような感じ。ほいで軍服来た兵隊がいてなんか死体を抱えとっ

たような…。こっちに多分窓があったと。奥が明るくて、手前は暗かったんじゃないかな。いやー、もうぼけてしもうて、うーん。この少年の目だけが印象に残っとるの。目だけ思い出す。バックはよう思い出せん。すみません。

恵　いえ。この壁はどんな、焼けてるんですか。

白井　そうねえ、中も焼けてたと思うな。

恵　これは、みんな中で焼け死んだ人ですか。

白井　うーん、それはわからんのです。中で死んだか、外から運び込んだんか。

恵　建物の向きはどっち向きなんでしょうか。どっちから入ったか。

白井　いや、それもちょっと…。申し訳ない。やっぱりねえ、中学三年の、子どもだったですからねえ。あまりの阿修羅なんで動揺して、どういうようなものがあったか、ほんとにわからんです。あっちやこっちでもういろんなもん見とるもんですからね。

岡田　そうですよね。

恵　（岡田に）福屋て今でも昔の建物のままですよね。

岡田　かなり改築しとるけどね。

恵　そっか…。

白井　こらやっぱり難しいですなあ、絵に描くのは。わしがもっとちゃんと覚えておればねえ。

岡田　（恵に）平和資料館とかネットとかで出来るだけ調べてみよう。で、下絵を描いてまた白井さんに見ていただけば。それを繰り返して描いていくしかないと

思う。

恵　はい。

白井　いや申し訳ない。御手間を取らせて。学校の勉強もせにゃならんのにねえ。

恵　いえ。

岡田　じゃあ次はいつ打ち合わせにしましょうか。

アツト　白井さん。

白井　はい。

アツト　僕の父は自衛官なんです。

岡田　飯島くん？

アツト　去年の七月、国会で集団的自衛権が認められるかもみたいな話をニュースでやってた時、妹が、今中1なんですけど、「お父さん死ぬかもしれん、兄ちゃんも徴兵されるかもしれん」って言って泣いたんですよ。そういうことってあると思いますか。

白井　うん、ほうじゃねえ。それはわしにはよう分からないけれども、わしの感じていることを言えば、この1、2年ほど不安を感じることはないんですよ、七〇年振り返ってみて。ここへ来て世界も日本も、おかしなった。うん。戦争を知らない世代の政治家がいろいろやっとるでしょう。ほいでまた子どもが銃を持って死んでいく、そういう世の中ったら悲しいじゃないですか。もうここらが（胸）ギシギシしとるわけです。ほいだもんだから、被爆証言をする気になったんじゃね。ええ。

アツト　わかりました。先生、僕も原爆の絵描きます。描かせて下さい。
岡田・恵・ナナ　ええ？
アツト　（白井に）描かせてもらってもいいですか。
白井　ほう、そりゃあ…、
岡田　ちょっと、待ってください。飯島君、どうしていきなり描く気になったの？
アツト　同じなんです。不安なんです僕も。絵を描いて白井さんのお手伝いができるんなら描きたいです。
白井　ほうね。
岡田　そう、うんうん、わかった、ちょっと座ろうか。（アツト座る）えーと、あのね、浅野さんにも言ったんだけど、これは簡単なことじゃないと思うの。二人で描くということになったら、打ち合わせの時間も倍になるでしょう。それだけ白井さんのご負担が増えるということになるよね。
白井　わしゃあ構わんですが。
岡田　えー、ありがとうございます。白井さんがいいとおっしゃって下さったとしても、大事なのは飯島君が白井さんの体調のことも考えて言ってるのかということ。自分の思いだけで決めていいことと違うと思うのよ私は。（白井に）すみません、内輪の話をお聞かせして。でも大事なことだと思うので。
白井　はい。
岡田　来年もこのプロジェクトは続くみたいだから、改めて来年取り組むことにしたら？

アツト　いや、今描きたいです。
ナナ　それはあんたのわがままでしょ。
岡田　えーとね、もう一つ。飯島君は今までわりと自分の描きたいように絵を描いてきたでしょ。被爆証言の絵はそういうわけにいかないと思う。白井さんが見たままを描かなくてはいけないわけだから。そういうことができる？
アツト　やります。
白井　いやもう、思った通り描いて下さって構わんですよ。
岡田　ありがとうございます、本当に。でもここは一日ゆっくり考えて、それから決めたらどうかしら。
アツト　……。
恵　描かせてあげてもいいんじゃないですか。
ナナ　えー？
岡田　浅野さん？
恵　なんか言いたいことありそう。言ったら。
アツト　…なんて言ったらいいかわからん。とにかく今描かんとて思ったんだ。
恵　不安だから？
アツト　（うなづく）それだけじゃないけど…。
恵　何？
アツト　うーん…うまく言えん。
白井　気持ちがウワッウワッとなっとる。

アツト　それです！
白井　ほうか。それじゃあ描かんとなあ。先生、ほんとにわしは構わんです。わしの話をこんなに真剣に受け止めてくれて、わしは嬉しいです。こりゃあじいちゃんも頑張らにゃあと思いましたよ。わしからもお願いします。
恵　途中で投げ出したら許さんよ。
アツト　投げ出したりせんわ。
ナナ　ほんとかなー。
アツト　うるせえよ。
岡田　ちょっと。心配なのは私も同じなんだけど。でもわかりました。白井さんもいいとおっしゃるんだから、許可します。
アツト　やった。
岡田　どの場面を描くか、考えはあるの？
アツト　白井さんがお父さんを見つけた場面を描きたいです。
白井　ほうね。あー、そりゃあええ。ありがとう。じゃあよろしくお願いします。
アツト　はい。
岡田　本当にすみません。急にこんなことで。
白井　いやいや。
岡田　じゃ打ち合わせの日程を。これから資料調べをして、デッサンに入るんですが、6月はテストが入るので、その前一週間は部活禁止なんですね。ですから次はどうしても7月始めにお願いすることになるかと…。

打ち合わせする中、ナナは少し離れた所から見ている。暗転。

シーン３　美術室

６月初旬。恵は下絵に取り組み、アツトはパソコンをのぞき込んでいる。ナナは静物画の続きを描いている。

アツト　だーっ！　大野小学校でも大野国民学校でも仮収容所でも出て来んし。くそー。
恵　学校には聞いたの？
アツト　中学と統合して中高一貫校になったのでそれ以前の資料はありませんとか言われたよ。
恵　７０年前だもんね。
アツト　とっとけよー、それぐらい。
恵　本川小学校とかの写真はあるんでしょ。
アツト　講堂の写真がないんよ。講堂で見つけたって言っとったじゃろ。
恵　じゃあ小学校、木造、講堂で検索したら。
アツト　うー。（やってみる）

岡田が資料を入れたキャリーバッグを引っ張って入って来る。

岡田　借りてきたよー。
恵　あ、ありがとうございます。
アツト　先生ー、大野小学校、全然資料見つかんないっす。
岡田　（資料を出す。恵も手伝う）資料館のホームページ見た？
アツト　他の小学校のがちょっとあるくらい。
岡田　学校には連絡してみたの？
アツト　中学と統合したから古い資料はないって。
岡田　そう。うーん、役場には聞いてみた？
アツト　え？
岡田　大野町の町役場とか。地元の図書館とか。
アツト　いえ。
岡田　大野町に行ってみたら。地元で探した方がいいと思うよ。
アツト　えー。
岡田　あきらめないあきらめない。あら、これ福屋の写真？　どこで見つけたの？
恵　平和資料館です。福屋百貨店の内部の資料ありますかって聞いたら、奥から出してきてくれて。でもこれだけなんですよ。外側の写真は何枚かあるんですけど。
岡田　うーん。福屋も行ってみた。
恵　行きました。でも全然変わっちゃって。

岡田　そりゃそうよね。
アツト　（写真集を見て）うわ、なんじゃこりゃ。
岡田　これは今の写真？　よね。
恵　はい。ネットで焼死体って検索したら出て来ました。
アツト　うげー…。真っ黒こげじゃん。
ナナ　恵平気なの。
恵　パソコンの画面に出てきたときはマウス持つ手が震えた。
岡田　うーん。
恵　（岡田に）でも描いてる時は恐くないんです。
ナナ　なんで？
恵　描く方に夢中だからかな。
岡田　なるほど（見る）
ナナ　先生怖くないんですか。
岡田　やっぱ怖いよね。私５歳の時に母とおばあちゃんに連れられて初めて原爆資料館に行ったのね。そしたらその日から夜電気ついてないと眠れんくなっちゃって。
恵　あー。
ナナ　わかるー。
岡田　うちは三次だから爆心地から遠いし、ほんとはそんなことないんじゃけど、自分の寝とる下に資料館で見たような人が埋まっとる気がしてね。

アツト　先生とこは誰か死んどるんですか、原爆で。
岡田　ひいおじいちゃんがね。中国新聞に勤めとって。結局御骨もみつからんかったんよ。
アツト　へー。
岡田　飯島くんのところは？
アツト　うちはいないっす。親父もお袋も生まれは県外だから。
岡田　そっか。
ナナ　小さい子にそんなもの見せるべきじゃないですよ。
岡田　んー、まあうちは身内が原爆で死んどるからね。
恵　資料館で被爆者のケロイド人形を撤去するって言う話もありますよね。
アツト　あー、あれはインパクトあるよな。
岡田　被爆者の方に言わせりゃあ、あんなもんじゃないって言うんじゃけえね。
恵　私も小学校で行った時は怖くてずっと下向いてました。じゃけど男の子とか笑ったりふざけたりする子もおって、先生に怒られてました。
アツト　それは怖いからだよ。怖がっとるって思われたくないけんふざけたりするんだよ。
恵　えー、そうなん？　飯島君もそうだったんね。
アツト　俺は違うよ。俺は、
岡田　下向いてた方？
アツト　んー、まあそうかな。

恵　なんね、やっぱり怖いんじゃん。
アツト　しょうがないじゃろ。
岡田　工藤さんはいったことあるの？
ナナ　ないです。
アツト　行けよ。
ナナ　そのうちね。
恵　８月６日はやめた方がいいよ、もっのすごい混むけえ。
ナナ　そうなんだ。
岡田　あの前後はねー、そうよね。外国からもいっぱい人が来るし。でもそれをあえて経験するのもいいかもしれんけどね。
アツト　そうじゃ。お前は８月６日の平和公園を経験した方がええわ。行け。
ナナ　偉そうに。
恵　あー、あのねえ、飯島君に頼みがあるんじゃけど。
アツト　え。
恵　モデルになってくれん？　福屋の少年の。
岡田　ああ、いいじゃない。白井さんも細かいことはよく覚えてないみたいじゃけ、何パターンか描いて選んでもらったら。
恵　はい。私もそうしようと思って。（デジカメを出す）
岡田　すごーい。
アツト　えー。

岡田　どこで撮る？　ここ（机）に寄りかかって撮る？
恵　いいですね。座って。
アツト　脱ぐ？
恵　もー、ふざけんでよ。
アツト　はいはい。

以下の会話の間にナナは鞄を持って出ていく。

恵　足を投げ出した感じ。次は両膝立てた感じ。次は、片膝だけ立てて。えーと、あと胡坐かいたような。（次々写真を撮る）
岡田　片目で睨んでもらったら。
恵　片膝たてて、睨んでみて。
アツト　片目て難しいな。
恵　右目つぶって。
アツト　え？
恵　変な顔―。
アツト　笑うな。
岡田　何かで片目隠したら。
恵　そうですね。（ハンカチを出して、片目をかくす）
アツト　洗ってあるかこれ。

恵　あるよ。さっきトイレで手ふいたけど。
アツト　おい。
恵　いいからいいから、睨んで。ちょっと上目づかいに。真面目にやって。
アツト　やっとるじゃろ。
恵　あ、いい感じいい感じ。（撮る。手を止めて）この子はどんな思いで死んだんじゃろ。
岡田　そうじゃね…。でもよかったね。
恵　え。
岡田　浅野さんが描いてくれるから、この子が確かにいたんだいうことが伝わるじゃろ。書かなかったら…。

間。恵は写真を撮る。

岡田　あれ、工藤さんは？
恵　トイレじゃないですか？
岡田　鞄がない。
恵　え？

三人顔を見合わせる。

シーン４　美術室

７月始め。白井が恵とアツトの下絵を真剣に見ている。恵とアツトは緊張している。岡田は下がって見ている。

白井　あらまー、もう形になっとる。すごい。そうそう、こんとなんよ。
恵　なかなかうまくいかなくて、こんな感じかなというのを描いたんですけども。
白井　ようしかし詳しう話もしとらんのに。
岡田　昨日描き上げたばっかりで。まだ下書きなんで、これで見て戴いて修正してから油絵で描いていきます。いかがですか。
白井　いやー、ちゃんと絵になっとる。ねえ。わし正直言ってこりゃ無理じゃろうと思っとったんですよ。自分でもイメージがあまりにも漠然としとるんでね。それがこんな、なんで描けるんじゃろうか。不思議な。
岡田　飯島君はわざわざ大野町まで行って来たんですよ。
白井　ほうね。
アツト　はい。
白井　そらまーえらい手間かけさせてしもうて。ありがとう。
アツト　いえ。
白井　（恵の絵を見ながら）うーん、あー。これがねえ、そう、わしは不思議だったんですよ。この少年がここにおるのが。原爆が落ちたのは８時１５分だから、

また福屋の開店前ですよね。それなのに中におる。今考えるとね、たぶんこれは、落ちた後でここへ運び込まれたか、自分で入ったか。

恵　え、じゃここに来た時はまだ生きてた。

白井　ほうじゃないかと思う。死んだ人間をわざわざ中には入れんでしょう、外でボンボン死体を燃やしとるんだから。

恵　あー…。じゃあこの中の人はみんな生きとるんですね。

白井　そうそう、うめき声をね、聞いた気がする。ここの中を通る時に。

恵　じゃ、服とかも。

白井　うん、着とったような気がする。ぼろぼろのを。裸の人もいたかな。ほいですぐ亡くなった人も多いと思う。この少年のように。

恵　わかりました。

白井　（アツトの絵を見て）あー、この時はね、髪の毛があったです。

アツト　え。

白井　顔のこっち側は腫れておったけど。髪の毛や歯が抜けたのは宇品の収容所へ移ってからですね。

アツト　そうなんですか。

白井　包帯はね、しとったのがずれておったですね。薬は赤チンくらいしかない。何しろ病院も何もみな吹っ飛んでしまったけえねえ、ただ寝かされてるだけ。うめき声やら悲鳴やら、匂いが酷くてね。その中で足元近くから親父の声がしたんですよ。「勝利ー、勝利ー」て。

アツト　足元！
白井　そうそう。
岡田　飯島君、講堂の写真確認していただいたら。
アツト　あ、そうだ。これ、大野西小学校の講堂の写真なんです。（写真を見せる）
白井　ほう。
アツト　中の写真はこれ一枚しかなくて。
白井　うーむ。そうですね。ここじゃったと思います。広いところじゃったからね。ここに何列も何列もぎっしり。足の踏み場もないくらいでしたよ。
アツト　はい。あー…。
白井　すまんねえ。でもこうして絵に描いてもらうと、なんかこう、いろいろ思い出してくる。うん。いやあ、ほんとに。ありがとう。
岡田　良かったじゃない。
恵　はい。
白井　いろいろ言ってすまんね。
恵　いえいえ。
白井　やっぱりね、隣近所でも被爆者は皆敬遠するんですよ。結婚にしても何にしても被爆者は駄目。そういう差別の中に生きて来るとね、意識的にどうこういうんではないが、原爆のことは話する気にならんのですよ。まあ思い出すとつらいしね。今までずーっと記憶を封印してきた。私は子どもが５人おりますけれども、知りませんよ子どもたちは。祖父ちゃんがどんとな被爆体験して、ど

うしたのか、皆知らん、詳しくは。だから急に話すモードにチェンジ出来んというか。なかなか記憶が出て来んのね。でも絵をこうして見るとね、次第に思い出してくる。うん。

岡田　じゃあ今日伺ったことを元に又書き直して、それをまた見ていただくようにしましょう。まだ伺いたいことある？

恵　あ、あと少年の座り方なんですけど、どれが近いですか。（絵を三枚見せる）

白井　ほう。うーん、これが近いような気がするな。

恵　わかりました。

白井　すまんねえ、もっとはっきり覚えておればねえ。

岡田　飯島くんは？

アツト　とりあえず、はい。

岡田　じゃあ、来週同じ時間にお願いしてよろしいでしょうか。

白井　（手帳を見る）はい、はい。また伺います、何度でも。あのう、絵のコピーをいただけないでしょうか。

岡田　はい。これ、このままでいいですか？　書き直したのじゃなくて。

白井　はい。見とるとまた何か思い出すかもしれん。うちの婆さんにも見せたいし。

岡田　わかりました。ちょっとお待ち下さい。（下絵を持って出ていく）

白井　（アツトに）大野までわざわざ行ってくれたんじゃね。

アツト　はい。学校に問い合わせても、古い資料は無いって言うんで、廿日市市の大野支所という所に行って、それから図書館に行って。

白井　それは大変じゃったねえ。
恵　他にも写真あるんでしょ。
アツト　あ。（コピー資料を出してくる）これです。
白井　あー。（見る）ありゃ、こんな石段上ったかのう。うん、こんな校舎じゃったと思います。
アツト　建物の外側は写真があるんですけど、中がなかなかなくて。
白井　ほうじゃろうねえ。それを絵に描くんじゃからすごいことよね。
アツト　苦労しました。
岡田　（入って来る）お待たせしました。このままでいいですか。（絵を白井に渡す）
白井　はいはい。（受け取って鞄にしまう）それじゃ、失礼します。いやいや、もうここで。
岡田　お構いもしませんで。ではまたよろしくお願いします。
白井　こちらこそ、よろしくお願いします。（恵とアツトに）じゃあ、またね。
恵・アツト　ありがとうございました。

白井は出ていく。

アツト　うわー。全面描き直しだよ。
恵　どうしよう。みんな生きとるなんて。
岡田　白井さんも証言始めて間がないから、まだ記憶が整理されてないんじゃね。

アツト　この間言ったのと違うし。
岡田　７０年前のことじゃもん、しょうがないでしょう。でも白井さん喜んどったじゃない、すごく。やっぱりビジュアル化すると記憶が刺激されるんだよ。この調子この調子。がんばろう。
アツト　まいったなー。
岡田　浅野さん。
恵　はい。
岡田　工藤さんのことなんだけど、何か聞いとる？
恵　いえ。ここ何日か学校休んでるんですよね。
岡田　そうなんよ。何か連絡ない？
恵　私も連絡とろうと思ってるんですけど、メールしても返事がないし。
アツト　スルーかよ。
岡田　担任の先生が連絡したら、お父さん御存知なかったみたいなんよ。
恵　え。
岡田　普通に学校に行っとると思っとったんだって。工藤さんところはお母さんと別居中だから。お父さんは早くに仕事に出て遅く帰って来るから気が付かんかったのね。
恵　そうなんだ。
岡田　お父さんが聞いても理由を言わないんだって。担任の先生にも話さないらしいの。で私の所に相談に来て、いろいろこの間のことをお話したら、原爆の絵が

原因じゃないかって。

アツト　ええ？

岡田　白井さんの被爆証言を聞いたのがショックだったんじゃないかって。

アツト　でもその後も出てきとったし。

岡田　そうじゃけど、なんか元気なかったじゃろ。

恵　はい。

岡田　私昨日工藤さんの家に行ってみたの。夕方と夜と二回行ってみたんじゃけど、ほら、今のマンションて入り口から先へ入れないでしょ。インターホン押したら反応はあるんじゃけど、出てくれんのよ。

アツト　あいつー。

岡田　もう困っちゃって。浅野さん、行ってみてくれんかしら、工藤さんの家に。

恵　わかりました。

岡田　お願いできる？　ごめんね。私より、浅野さんの方が話しやすいかもしれんし。

恵　今日これから行ってみます。

岡田　ありがとう。

暗転

シーン5　ナナの家

ナナが座っている。チャイム。スイッチを押すとインターホンから恵の声。

恵　（声）工藤さん？　浅野ですけど。あの、話しがあるんじゃけど。

ナナ、スイッチを切る。何回もチャイムが鳴る。

ナナ　うっせえな。

恵　（外から）工藤さーん。くーどーうーさーん。

ナナ　げっ。（窓を開けようか躊躇する）

またチャイムの音。

ナナ　んもー。（インターホンに出る）うるさい。今解除するから。

ややあって恵が入って来る。

恵　こんにちは。

ナナ　あんたねえ。小学生じゃないんだからさ。

恵　うん。…昨日岡田先生来たのに出んかったんだって？

ナナ　……
恵　なんで？
ナナ　怒ってたでしょ。
恵　怒ってないけど、なんかげっそりしてた。他の先生にいろいろ言われたみたい。
ナナ　えー…。
恵　（ナナに）なんで休んだの、ここんとこ。
ナナ　ふん。
恵　連絡もくれんし。
ナナ　美術部やめようかなーと思って。
恵　なんでー？
ナナ　……。
恵　工藤さん私よりずっと絵うまいのに。今描いとる絵だってすごい素敵なのにまだ途中だし、もったいないじゃん。
ナナ　……。
恵　やっぱり原爆の絵が原因なの？
ナナ　ええ？
恵　なんか職員室ではそういうことになっとるらしい。
ナナ　うわー…。
恵　違うの？
ナナ　うー。あんたあの白井さんの話聞いてどう思った？

恵　え、どうって…ぶわーって来た。
ナナ　何？
恵　うん。
ナナ　ちゃんと説明しなさいよ。
恵　言葉は無理…ってか、少人数で目の前でお話聞いて本当に怖さを知ったっていうか、白井さんの思いみたいなのが伝わってきて、今まで平和教育とかいろいろ聞いてはいたんじゃけど、どっか他人事のように思っとったなって。話を聞くまでの原爆は怖いとか、残酷だとか、そういうのは何か違うというか、知ってるつもりになっとったけど、全然知らなかったんじゃって。
ナナ　でしょ。平和教育受けてたあんたでそれでしょ、私全然免疫無しに聞いたから。
恵　そうか。
ナナ　もう頭ぐらぐら。何十万も人が普通に生活してる上に原爆落とすってどういうこと？　丸々一つの市が無くなっちゃうって。私アメリカ好きなんですけど。あこがれてたんですけど。どうしてくれんのとか。街歩いてても、この下にまだ骨あるかもとか、この川に死体が流れてたとか、もう風景全部違って見えちゃうんだから。
恵　うん。
ナナ　聞かなきゃ良かった。あんな話。でも聞いちゃったら聞かない前には戻れないじゃん。飯島まで絵描くって言い出すし。もうどんどん三人で盛り上がっちゃってさ。

恵　じゃあ一緒に描こう。
ナナ　え。
恵　原爆の絵。
ナナ　無理無理無理無理。
恵　どうして。
ナナ　無理だって。あんたたちはいいよ、あんたは祖父ちゃん祖母ちゃん被爆者でしょ、飯島は何？　父さん自衛隊？　なんかとっかかりがあるじゃん。私無いから。全然。東京出身だし。
恵　別に、無くたって。
ナナ　私には描けない。
恵　考えては見たんだ。描くことも。
ナナ　えー。考える以前の問題だよ。
恵　そうなの？
ナナ　だって、私ずーっと原爆なんて自分には関係ないって思ってたんだよ。今だってさ、なるべくならそういう戦争とか歴史とか面倒なことは避けて生きていきたいと思ってんだよ。そんな人間に描けるわけない。
恵　んー…。
ナナ　あー、平和な暮らしがしたいよう。
恵　今って平和でしょ？
ナナ　あのさ、白井さんが不安だ不安だっていうのは、みんなが平和だ平和だヨイヨ

イヨイって浮かれてる間にどんどん戦争が近づいてるってことでしょ。そういうの平和っていうの。

恵　そうか。

ナナ　あー、バカでいたいよう。

恵　平和って何じゃろうね。

ナナ　それ考えてたらドツボにはまった。

恵　工藤さんてすごく深く考える人なんじゃね。

ナナ　あんた全然考えないわけ？　平気なわけ？

恵　そうじゃないけど。

ナナ　何。

恵　……。

ナナ　んもー。…（ひっくり返る）

恵　もう、描くしかないって。

ナナ　なに？

恵　思った。白井さんの頭の中の光景を、そのまま描くしかないって。私が怖いとかかわいそうとか、そういうことを言うのはなんか違うと思う。もうそんなの超えてるというか、私は全然知らないから、原爆のことを。ただもう白井さんの手になって描くしかないんじゃないかって。

ナナ　……。

恵　だからかな。資料調べてる時は怖いと思うけど、描いてる時は怖くない。白井

さんが見たものになんとか近づけたいって、それだけだから。
ナナ　できるの、そんなこと。見たこともないのに。
恵　わからん。わからんよそんなこと。全然自信ない。でもね、この間白井さん下絵見て、絵を見ると思い出すって言ったんよ。
ナナ　どういうこと？
恵　不思議なんじゃけど。絵になったものを見ると、これは違うとか、こんな感じとか、記憶が掘り起こされるみたいなんよ。
ナナ　へえ。
恵　これを繰り返して行けばいいんじゃないかなって。ちょっと思った。
ナナ　えー、大変じゃないそれー。
恵　しょうがないよ。
ナナ　あんたってけっこう強いよね。
恵　……あんたっていうのやめてくれん、かな。
ナナ　え。
恵　なんか馬鹿にされとるように感じるけえ。
ナナ　そう？
恵　恵って呼んでくれん？
ナナ　いいい？
恵　？
ナナ　ダメあたしそういうの苦手。

恵　なにが。
ナナ　そういう関係。名前で呼ぶとか。慣れてないから。
恵　ええ？　だって友達とか普通、
ナナ　だから私は友達いないから。
恵　いないの。
ナナ　悪い？
恵　いえ。
ナナ　めんどくさいじゃん友達って。一人の方が気楽だし。一人で絵描いてれば私は
それでいいの。
恵　へえ。
ナナ　あー、バカにしてる。ボッチかわいそうとか思ってんでしょ。
恵　いやいやいや。
ナナ　ふん。なんでわかんないかな。一人の方が楽なのに。
恵　わかった。それは置いといて、やっぱり絵は描きたいんじゃろ？　だったら美
術部やめることないじゃん。
ナナ　原爆の絵が邪魔なの。
恵　だから一緒に描こうよ。
ナナ　無理。残酷な絵は無理。本当に吐きそうになるから。
恵　うん…。（考えて）死体とか出て来ない絵だったら？
ナナ　ん？

恵　白井さんが包が浦から見た原子雲を描くんよ。きっとすっごい綺麗ですっごいこわい絵になると思う。工藤さんなら描けるよ。うん。どう、原子雲の絵。

ナナ　……。

恵　今度の日曜日、スケッチに行こうや。

ナナ　何それ。

恵　包が浦にスケッチに。

ナナ　やだ。

恵　飯島君ね、大野まで行ったんと、小学校の写真探しに。

ナナ　そうなの。

恵　小学校と役場と図書館、ずっと回ったんと。やっと一枚講堂の写真見つけたんじゃって。

ナナ　へえ。

恵　なんかそれ聞いて悔しかったんよ。先越されたーって。学校サボって行ったんよ。

ナナ　サボりたかっただけじゃない。

恵　そうじゃないよ、平日でないと役所は開いてないからだって。

ナナ　ふん。

恵　すごいやる気だしとるんよね。

ナナ　へえ。

恵　私も白井さんの歩いたところを歩いてみたいんよ。なんかため込みたいんよ、

ナナ　体の中に。ねえ、行こうや。
恵　やだ。
ナナ　…これからずっと学校休むの。
恵　そんなこと言ってない。
ナナ　美術部やめるの。
恵　……。
ナナ　向き合おうよ、怖くても面倒くさくてもなんでも。
恵　わかった。
ナナ　え。
恵　言いたいことはわかった。だからもう帰って。
ナナ　…。
恵　もう頭ぐちゃぐちゃ。ちょっと一人にして。
ナナ　うん。…待っとるけえ。（帰りかけて）…もし包が浦行くなら、お弁当付きで行こうね。おばあちゃんにお稲荷さん作ってもらうけ。おばあちゃんのお稲荷さんめっちゃうまいけえね。
恵　……。
ナナ　鹿もいるんだよね、宮島って。
恵　鹿？
ナナ　そこらじゅう普通におるよ。
ナナ　へー。

恵　可愛いよ。…じゃあね。
ナナ　ちょっと。
恵　？
ナナ　…包が浦行くだけなら、行ってもいいけど。
恵　ほんま！
ナナ　でも描かないからね！
恵　わかった。学校は？
ナナ　学校？　んー、わかんない。
恵　わかんないの？
ナナ　そのうち行くからって言っといて、岡田先生に。
恵　うん…。じゃあ。お邪魔しました。
ナナ　お構いも致しませんで。
恵　（笑って）またね。工藤さん。
ナナ　はいはい。

恵去る。ナナひっくり返る。

ナナ　あー、面倒くせーっ！

暗転

シーン5　恵の家

前場の夜。綾子が洗濯物を畳んでいる所に恵が帰って来る。

恵　ねえおばあちゃんおばあちゃん。
綾子　何。
恵　今度の日曜日お稲荷さん作ってくれん。
綾子　何ねいきなり。
恵　美術部の子とスケッチしに行くんよ、包が浦まで。
綾子　包が浦？
恵　宮島の。
綾子　へー。
恵　ね、ええじゃろ、お弁当にお稲荷さん。
綾子　もう高校生なんだから自分で作りなさい。
恵　おばあちゃんのお稲荷さんじゃないとだめなんよ。パワーがいるんよパワーが。
綾子　やかましい、何パワーて。
恵　美術部やめるって言ってる子がおってね、でも私はその子に原爆の絵を描いてほしくて、そのために包が浦に行くんよ。じゃけえね、お弁当も特別じゃないとダメなの。

綾子　原爆の絵？
恵　うん、今ね、美術部で原爆の被爆証言の絵を描いとるんよ。白井さんていうおじいちゃんの。
綾子　被爆証言の絵？　なんで。
恵　平和資料館の企画でね、うちらがそれに応募したんよ。
綾子　あんたが被爆三世だから描けて言われたんね。
恵　違う違う。自分でやらせて下さいって頼んだの、先生に。
綾子　わざわざ。どんな絵を描きよるの。
恵　私が描きよるのは、福屋の仮収容所の絵。もう一人の子は大野町の救護所。もう一人の子には包が浦から見た原子雲を描いてほしいんよ。
綾子　それでか。
恵　うん？
綾子　あんたこのところ何回か夜中に起きとったろう。
恵　うん。
綾子　怖い夢見てうなされたんじゃないんね。
恵　うーん、そういう時もあったけど。
綾子　ほうじゃろう。あんなに寝つきのええ子がなんでじゃろう思っとったんよ。
恵　起こしちゃった？
綾子　もともと年寄は眠りが浅いけえね。
恵　ふん。

綾子　怖くないんね、そんな絵描いて。
恵　別に。
綾子　ほんまに。
恵　ほんまは怖い。
綾子　ほれみなさい。無理してそんな絵を描くこたあないのに。なんでやるって言ったの。
恵　うーん、祖父ちゃんが死んで、なんにも話をきかんかったことがすっごい心残りじゃったんよ。
綾子　……ほうね。
恵　ばあちゃんも話してくれんし。
綾子　聞いて楽しい話じゃなし。
恵　白井さんもずっと話さんかったんと。でもここんとこ日本も世界もおかしゅなった、それが悲しいって証言を始めたんじゃと。去年から。
綾子　へーえ。
恵　ねえ、作ってくれる？
綾子　まあ、作らんでもないけど。
恵　やったー！
綾子　ちゃんと手伝うんか。
恵　手伝う手伝う。じゃあお願いね。今度の日曜日じゃけ。忘れんでね。
綾子　わかったわかった。

恵退場。綾子は放心する。暗転。

シーン６　包が浦

７月半ば。恵登場。続いてナナ、荷物をかついだアツト。

恵　ここがいいじゃん。陰になっとるけ。
ナナ　あっつ。ああっつー。
アツト　桟橋から２０分なんてウソだろ。３０分かかったろ、ゆうに。
恵　シート出して、そこに入っとるけ。
アツト　少しは休ませろ。
恵　食べさせんよ、お稲荷さん。
アツト　鬼。人でなし。
ナナ　荷物もちが文句言うな。
アツト　おれは荷物持ちなんて聞いとらんわ。スケッチに行くってだけ、
恵　まあまあまあ。（荷物からビニールシートを出す。ナナに）手伝って。

二人でシートを広げる。

ナナ　ほんとそこらじゅう鹿がいるんだね。
恵　じゃろ。
ナナ　いきなり道端とかに鹿がいるんだもん。びびった。でもいいとこだね。
恵　海水浴場なんよ、ここ。向こうにはキャンプ場もあるって。
ナナ　水着持ってくればよかったかも。
恵　さあてと。（荷物を真ん中に置いて広げる）じゃーん。
ナナ　わーすごーい。
アツト　おー。
恵　もー、乱暴に持って歩くけ中身が片寄っとるじゃん。
アツト　いただきまー、
恵　ちょっ、お手拭きお手拭き。
アツト　（手を拭いて）まーす。
恵・ナナ　いただきまーす。
アツト　うめえ。
恵　こっち五目でこっちゆずね。
ナナ　うん、おいしい。
恵　ん、まあまあかな。
アツト　偉そうに。ばあちゃんに感謝しろよ。
恵　それは私が言うことでしょ。私は手伝ったもん。
アツト　何やったんだ。

恵　ご飯つめるの。
アツト　そんなん誰でもできる。
恵　破れないようにいれるのは大変なの。
ナナ　幸せー。こんど作り方教わりにいこ。
恵　来て来て。ばあちゃん喜ぶけえ。
ナナ　絶対行く。
アツト　お前料理なんかするん。
ナナ　うちでは料理は私の仕事。掃除と洗濯がお父さん。うちの親別居中だから。
アツト　…ふうん。
恵　お母さん東京なんよね。デザイナーだっけ。
ナナ　そう。インテリアの。
恵　じゃけえ工藤さんも絵がうまいんじゃね。
ナナ　えー関係ないよ。
恵　だって小さい頃から絵描いとったんじゃろ。
ナナ　そうだけど。
アツト　よくこっちに来たな。
ナナ　だって母親は一人で大丈夫な人だもん。お父さんの方が心配だから。
恵　やさしいね。
ナナ　まあね。
アツト　言ってろ。友達とかと離れて寂しくないん。

ナナ　いないもん友だちなんて。
アツト　え。
ナナ　ねえ、広島ってあっち？（客席奥を指す）
恵　あそこに高いビルが二つ並んどるじゃろ。あの左側のがリーガロイヤルホテルで、中心部だって。
ナナ　原爆ドームは？
恵　右側のビルの奥。右側のが神屋町のビルなんだって。
アツト　遠いなあ。
ナナ　もやってるね、なんか。
アツト　夏はこんなもんじゃねえの。こっから広島まで、6，7キロて言ってたっけ、白井さん。
恵　直線距離にして十キロだって。管理センターのおじさんが言ってた。
アツト　こんなとこまで死体が流れてきたのか。
恵　信じられんね。こんなきれいなとこなのに。
アツト　原爆のキノコ雲の高さってどれくらいなの。
恵　少しは自分で調べなさい。
アツト　知らんのか。（スマホを出して調べる）
恵　ねえ、飯島君のお父さんて自衛隊なの。
アツト　うん。
恵　何やってるの？

アツト　知らねえ。
恵　知らないの？
アツト　言わないんだよ仕事のこと。……あった。高度一万六千メートルまであがったって。
恵　そんなに？　それって入道雲より高いの？
アツト　入道雲？（調べる）
恵　…ねえ、お父さん外国に行ったりするの？
アツト　行かねえ。
恵　そうか。ならまだ安心じゃね。
アツト　安心じゃねえよ。
恵　何が？
アツト　ちょっと待てって。うん、入道雲とも呼ばれる積乱雲は、通常高度一万メートル位、だって。だから入道雲の１・６倍の高さだよ、原子雲。
恵　１・６倍？
アツト　もの凄い上昇気流が無いとそこまで上がらんらしいぞ。
恵　ええー。

三人広島方向を見る。間

ナナ　ねえ、安心じゃないってどうして？

アツト　え？
ナナ　お父さん。
アツト　ああ、親父病気になったの。鬱。過労で。
恵　今？
アツト　じゃなくて、俺が小学５年生くらいの時。一日２０時間くらい働いてボロボロ。
恵　えー、どうして？
アツト　わかんないんだよ、仕事のことは言っちゃいけないの。
ナナ　家族にも？
アツト　そう。守秘義務ってーの？
ナナ　へえ。
アツト　最悪だったよ、あの頃は。ささいなことでぶん殴るし。
恵　えー。
アツト　飯の食い方が悪いとかさ。
恵　大変だったね。
アツト　怖かったよ。
恵　そう。
アツト　殴っといて泣くんだもん。
恵　え？
アツト　親父。もとは真面目な人じゃけ。コントロールできなくなるんよね自分で。
ナナ　それで絵を描き始めたんだ。

アツト　ん？
ナナ　絵を描き始めたの小学校五年の時だって言ってたじゃない、前。お父さんの病気と関係あるんじゃないの？
アツト　ねえよ。……いや、あるか。あん時もモヤモヤ不安じゃったけ、それ吐き出すために絵描きよったんかなあ。
恵　どんな絵？
アツト　ようわからん絵。
ナナ　エッチな絵？
アツト　ちげーよ、バカ。
ナナ　ふうん。
恵　お父さん治ったの？
アツト　一応な。奇跡的に職場復帰。
恵　良かったねー。
アツト　またいつ再発するかわからんけどな。
恵　お父さんのことがあるから原爆の絵描く気になったの。
アツト　親父と白井さんのお父さんが重なったんよ。親父だっていつそうなるかわからんけえ。
恵　そうなの？
アツト　今国会でやりよる法律が通ってしもうたらやばいらしい。
ナナ　へー。

恵　…飯島君はこの間大野町にいったじゃろ。どうだった？
アツト　どうって。
恵　小学校も行ってみたんじゃろ。
アツト　うん。でも全然変わっちゃってるけどね。
恵　なんか感じんかった。
アツト　うん。役場の人がさ、国道二号線から川沿いにずっと登って行きなさいって言ったのね。
恵　川があるんだ。
アツト　なんかちっちゃい川。しょうがないけえそれをてくてく登っていったんよ。暑くてさ。その時、ああ白井さんもこうやって川を上っていったのかもしれんなと思った。そうやって上がっていくと、あるんよ。小学校。
恵　それそれ。足で歩くといろいろ発見あるよね。じゃけえ桟橋からここまで歩こうって行ったの。バスもあるけど。
アツト・ナナ　バスあったの？
恵　うん。コミュニティバスみたいなの。
ナナ　えー。
アツト　お前ひでー。
恵　でも歩いたから鹿にも会えたし、古いトンネルも見つけたし。
ナナ　あれ「千と千尋の神隠し」のトンネルみたいだったね。
恵　ねー。

ナナ　すごい雰囲気あった。

恵　でも白井さんは、山を越えて包が浦に行ったっていうから、白井さんがここにいた時はこのトンネルはなかったのかなーとか思いながら。で、トンネルくぐるとパッと開けて、ここになるわけじゃろ。ここに軍需工場があった。その跡地をキャンプ場と海水浴場にしたわけじゃろ。元々国有地じゃったけえよ、きっと。

アツト　ああ。

恵　ほんとに真正面に広島が見える。ここに立っとったんよ、１６歳の白井さんが。なんか不思議な気するよね。で原爆のキノコ雲がウワッウワッと盛り上がるのを見たんよ。

間

恵　じゃけえ描こうや。ね。

ナナ　えーまたその話。

アツト　何。

恵　工藤さんにね、原子雲の絵を描いてもらいたいと思って。白井さんが見た。

アツト　へー。

恵　それなら死体とか描かんでいいじゃろ。

アツト　ふん。いいじゃん。描けよ。

ナナ　あんたが言うな。
アツト　んだよ。
ナナ　自分で決めたいの。
恵　うん。
アツト　へーえ。
ナナ　しょうがない。描くか。
恵　（声なくバンザイ）
アツト　おい、しょうがないは白井さんに失礼じゃろ。
ナナ　あたしのしょうがないは深いんだよすごく。
恵　うん。
アツト　意味わかんねえ。
ナナ　わかんなくてけっこう。
アツト　ったくお前はいちいち、
恵　私、こんど宇品から基町まで歩いてみようと思うんよ。白井さんが叔父さんと歩いた道。一緒に行かない？
アツト　え。
恵　ナナも。
ナナ　私もー？
恵　またいろいろ発見があると思うよ。
ナナ　またお稲荷さんつき？

恵　うん。
ナナ　なら考えよっかな。
アツト　今度はお前ら持てよ。
恵　キャリーバッグで運ぼう。
ナナ　うん。
アツト　ちぇ。
恵　それで、学校はどうするん、工藤さん。
ナナ　学校ねえ。とりあえず行くかー。あーめんどくさ。
恵　よし。（スマホを出す）
ナナ　どこにかけんの。
恵　岡田先生。
ナナ　やめてよ。
恵　だめ。ずーっと心配しとるんじゃけ。
ナナ　やめてって。（追いかける）
恵　（逃げながら）あー、岡田先生ですか。はい、今包が浦です。明日から学校行くって行ってます。はい、はい。かわってって。
ナナ　えー。
恵　ちゃんとあやまりんさいよ、この間のこと。
ナナ　（受け取って）あのー、はい。この間はごめんなさい。はい。いやそんなことないです、え、先生、えー。ごめんなさいごめんなさい。はい。わかりました。

はい。（切る）

恵　なんて？

ナナ　なんか泣いてたみたい。えー。（恵、スマホを受け取る）

アツト　やれやれ。なあ、帰りはバスにしようや。

恵　うん。私バスの時間聞いてくる。

ナナ　え、じゃ、私ちょっとスケッチする。恵のスケッチブック貸して。

恵　うん。…今恵って言った？

ナナ　私？　言った？

アツト　うん。

恵　はい、ナナ。（スケッチブックを渡す）

スケッチブックを受け取ると、ナナは広島の方を向いてスケッチを始める。その後ろで、恵とアツトは顔を見合わせる。

シーン６　美術室

七月下旬。恵とナナはキャンバスにスケッチブックを立て掛けている。アツトは机の上に下絵を並べている。白井が岡田に伴われて入って来る。

白井　こんにちは。
恵・ナナ・アツト　こんにちは。
白井　お土産持って来たよ。
アツト　うおー！　ありがとうございます。いただきます。（手を伸ばす）
岡田　ダメ！　まず絵を見てもらうのが先でしょう。
アツト　え、でもせっかくじゃけ。
白井　ほうじゃのう。
岡田　ダメ。
アツト　えー。
白井　だめじゃそうな。ほいたらまず絵を見せてもらうかな。
アツト　はい。（下絵を並べたところに白井を導く）これなんですけど。
白井　ほう。
アツト　これはこの足が白井さんの足で、足元にお父さんを見つけた所。お父さんが下から見上げる形になってます。こっちは白井さんを画面に入れて、お父さんと目が合った感じ。これはお父さんの顔をアップにした絵で、白井さんが画面に入らないバージョンです。どれがいいですか？
白井　ほう、こりゃすごい、三枚も描いてくれたんか。ありがとう。ふーむ、そうじゃのう、どれも捨てがたいが、これがいいかもしれんね。どうかね。（二枚目を選ぶ）
アツト　わかりました。じゃあこれで作業を進めます。

恵　白井さん、私のはこれなんですけど。（イーゼルに導く）軍服を着てゲートル巻いてるようにしました。

白井　ほう。あー、よく描けとる。うん。すごいすごい。はー。…これね、これは靴を履いとる。

恵　はい。

白井　この少年は靴は履いとらんかったような…。

恵　裸足ですか。

白井　どういう訳かね、靴を履いとる人はほとんどおらんかった。吹き飛ばされてしもうたんかね。皆裸足でした。それからこれ、傷の向きがね、バラバラでしょう。こう顔面をやられとるいうことは、こっち側から熱線を受けたわけだから、こっちがバーッとやられて、こっち側はそうでもないのね。この、どっちから光を受けたかいうのが原爆の場合は大事なんよ。

恵　はい。直します。座り方はこれでいいですか。

白井　うん、いいと思う。あとねえ、なーんか、こう、この壁に窓があったような気がするのう。

恵　窓？

白井　うん、なんか、上までこう続いちゃおらんかったような。

恵　はい。窓枠とかは。

白井　そういうものは残っとらんかった思う。燃えてしまっとるからね。

恵　わかりました。描き直します。

白井　すまんねえ。
恵　いえ、大丈夫です。
白井　えーと、あなたが今度から描いてくれる。
ナナ　工藤です。よろしくお願いします。
白井　よろしくお願いします。あー、包が浦から見た原爆雲。これはいい。ここから始まるわけじゃから。証言が。うんうん。
岡田　この三人で包が浦に行ったんですよ。取材のために。
白井　ほうね。三人で。
恵　はい。
白井　それはそれは。
ナナ　このままの絵か、人物をいれるのもありかと思って。（紙を切り抜いた人物を下絵に乗せる）こっちとどっちがいいですか。
白井　ほう。ああ、人物があった方がええかね。これはわしかいの。
ナナ　そうです。
白井　なるほどねえ。（岡田に）これ、こがいな工夫がねえ。すばらしい。はい。人物ありでお願いします。
ナナ　わかりました。
白井　この前に比べると随分進んだ感じですなあ。
岡田　授業が終わってから部活の時間が短いんですよ、だからみんな土日も学校に来てがんばってるんです。

白井　あらまー、土日も。それはすまんねえ。ありがとう。じゃあ、一渡り見せていただいたから、休憩して食べて下さい。
アツト　はーい。

机を出す、椅子を並べるなど皆かいがいしく働く。

岡田　白井さんもどうぞ。
白井　いや、わしはいいから、皆さんで食べて下さい。
恵・ナナ・アツト　いただきまーす。
アツト　うめえ。
ナナ　おいしーい。
白井　そうかい。そりゃ良かった。うちの近所のケーキ屋さんのなんじゃが。
ナナ　え、どこですか。
白井　宇品三丁目の。
ナナ　教えてください、今度行きます。
恵　私も。
岡田　でも、本当にお気を使わないで下さい。何度も来ていただけるだけでありがたいので。
白井　いやー、みな頑張ってくれとるからこれくらいサービスせんと。
恵　お腹すいとるけ余計おいしい。ね。

アツト　がっつくなや。
ナナ　あんたこそ。
岡田　白井さんはどういうお仕事をされていたんですか？
白井　砕石業いうのありましてね、山の岩石を砕いて、コンクリートやら、道路やら、ああいうものの骨材を作る、そういう機械を作るメーカーに勤めとりました。
アツト　こつざい？
白井　芯になる材料いうんかな。
アツト　へー。
岡田　そこで戦後ずっと。
白井　いやー、それまでにいろいろやりましたよ。中国電力の工場で流れ作業でスイッチ作ったりね。ワックスを作る会社いって、それからプロパンガスの会社作ったり、インスタントカレーの会社つくったりね。
アツト　カレー？
岡田　えー、ご自分で会社を立ち上げたんですか。
白井　そう。作っちゃ潰し作っちゃ潰しでね。最後に砕石工場のプラント会社に入って、そこで定年まで勤めました。
岡田　そうですかー。ご苦労なさったんですね。でもお元気ですねえ、とてもそんな御年には見えないです。
白井　いやー、見た目はね。被爆した人間は表では元気そうにしとるがね、中はぐだぐだ。私も、胃癌をやり、前立腺、脱腸をやり、ほいからリンパ腫は手術し、

両目白内障の手術して、今リューマチ。わしでもね、朝、起きた時にものすごいつらいことがある。物が言えんで。もう喉はカラカラ、暑くもないのに熱が出て汗がタラタラ、今日持てるかのーと、いうようなことがね、繰り返し繰り返しあるんですよ。言やあせんけども。でもただね、孫やなんかにびーこらびーこらいうの見せられやせんから、頑張って元気そうな風しとります。

岡田　お子さんは何人ですか。

白井　5人。孫がね、えー、9人。喜寿の祝いの時に子どもと孫がみんな集まったら二一人おるんです。

ナナ　すごーい。

岡田　大家族ですね。

白井　ほじゃからこの七〇年で、まあ走馬灯のようにいろいろなことが頭に出て来ましてね。私らの年代の者はねえ、長い戦争、それから原爆いうものの惨禍をね、戦争の愚かさ、馬鹿らしさ、いうとか平和の尊さいうものはね、身に染みて感じとるんです。日本に平和憲法が出来、ほいからベルリンの壁が崩壊して、冷戦は無くなる、ほいから核廃絶運動がどんどん高まってくる。はあいい世の中になったなあと喜んどったわけ。孫の成長じゃなんじゃ楽しみ幸せいうものをね、本当にありがたいいうて、神に感謝するような気持ちになっとったんですよ。ところがね、ここへきて、はあねえ、新聞見るたびに皆おかしゅうなっとる状況ばかりでしょ。そのたんびに今までの自分らの過去がよみがえって、悲しくなってねえ。そういうような気持ちがむくむくむくむく燃え上がるんです

よ。ほいだから、話をしたくなかったんですが、話していかにゃあいけんなと。子どもたちのためにね。

間　暗転

シーン7　モンタージュ　美術室

八月

①　イーゼルを立て、キャンバスを置く恵、アツト、ナナ。

アツト　真っ白いキャンバス。おー。

ナナ　めっちゃ緊張するわ。

恵　けっこう臭いね油って。

岡田　今日から油絵に入ります。描き方は水彩とそんなに違わないけど、油絵の場合は絵具をその都度油で溶いて使うのが違うのね。油絵は耐久性があるし、質感が出るし、何度も塗り直しがきくからこういう絵には向いてると思います。今日はまず地塗りをしてもらいます。

恵　地塗り。

岡田　キャンバスの全面を一つの色でまず塗ってしまうの。真っ白なキャンバスに直に絵を描いていくと、派手になりすぎるから。地色というのは絵の雰囲気を作

る、絵の印象を作る色なのね。上から重ねて塗っていくから、出来上がりと違う色で構いません。例えば、命とか怒りがテーマだとすれば、真っ赤に塗ってもいい。死とか絶望がテーマだったら黒く塗るとか。明るいテーマなら明るい色。出来上がった時には見えなくなっても、絵の厚みが増すし、塗り残しがなくなるから印象がまとまるの。自分の絵のテーマは何か、どういう印象を見た人に与えたいか、よく考えて、塗る時は絵具を油で薄めておつゆ状にして、太めの筆で塗って下さい。

恵　なんだろ。何色だろ。

アツト　俺は赤だな。血の色。

ナナ　えー、もう決めたの。

岡田　地塗りが乾いてから下書きをします。

②　パレットを持ち、絵を描く恵、アツト、ナナ。

ナナ　あー、わかんない！　雲の色がわかんない！　もー。

岡田　描いてみて、また白井さんに見てもらえばいいんだから。ああ、色見本作ってみたら。

ナナ　色見本。

岡田　水彩でいいから画用紙に、いくつか色の見本を描くの。この位の大きさでいいから。それを見てもらって選んでもらったら。

恵　先生、筆がなんか絵具がのらなくなっちゃったんですけど。よく洗ったのに。

岡田　え、これ、何で洗った？
恵　水と石鹸で。
岡田　先に油で洗った？
恵　油が先なんですか？
ナナ　そう言ったじゃん。
恵　えー。
岡田　筆洗油でまず洗ってからでないと。
恵　どうしよう。
岡田　とりあえず先生の貸してあげるから。
ナナ　（アツトに）ちょっと、靴の裏絵具だらけじゃない。
アツト　え。（見て）やっべ。
ナナ　もー、新聞紙敷きなさいっていったでしょ。（立ち上がる）
恵　ナナ！　スカートに絵具ついとる！
ナナ　え！　キャー、どうしよう！
アツト　これじゃねえの。（ナナの椅子から絵具のチューブを取り上げる）
ナナ　先生ー！
岡田　あわてないあわてない、当て布して上から油で叩けば落ちるから…、もう！　みんなちゃんと作業着着なさいよ！

③　白井が来ている。

白井　うーん、やっぱりこの壁は窓じゃなかったかのう。
恵　なんか違和感がありますか。
白井　そうねえ。うーん。
恵　やっぱり窓が無くて上まで壁があった。
白井　でもないんよねえ。どういったらいいか。
恵　窓は無しで、壁がこの辺までで、上が開いてるとか。
白井　そうね、そう。そんな感じじゃった。でも、この間よりずんと良くなった。
恵　そうですか。
白井　この少年の顔がね。ようなった。うん。
ナナ　白井さん、雲の色なんですけど。どれが近いですか。（画用紙を三枚見せる）
白井　うーん、こういう層になって分かれておるわけじゃなくて、外側と中側で違ったりね。奥の方が光っておったり。うん。これが一番近いかのう。
ナナ　わかりました。
アツト　白井さん、僕のは。
白井　はいはい。おお、よく描けとるね。うんうん。んー？　あれ。
アツト　何か。
白井　あれ、何か足りん。なんじゃろ。
アツト　え、この辺ですか。
白井　いやいや、あ、そうだ。帽子が無い。

アツト　帽子。
白井　戦闘帽戦闘帽。これ。（かぶる振り）
アツト　ああ、白井さんはこの時戦闘帽を被っとったんか。
白井　そうそう。これはもう習慣みたいなもんじゃから。無帽ということはないんよ。
アツト　はい。書き足します。
白井　いやみんな大変じゃあ、こりゃあ。申し訳ない。
岡田　いえもう、遠慮しないでどんどん言って下さい。その方がいいです。

④　岡田、白井はいない。絵を描いている恵、それをのぞき込むアツト、ナナ。

アツト　なるほど、まず肌色を塗って、その上に火傷の赤、黒こげの黒、と塗り重ねていったわけか。
ナナ　考えたね。
恵　だって、人間をいきなり黒で塗るなんてできんよ。
アツト　おれも赤のチューブ取った時違和感あった。人を赤で塗るんかと思って。
恵　怖いよね。
ナナ　えー、怖がってるようには見えないけど。
恵　不思議よね、キャンバスの前に座ると、よし、描こうってなって怖くなくなるんよ。人の心がなくなるんかな。

ナナ　うん？
アツト　おれはこんなに細かく描けんわ。
ナナ　表情がいいよね。
恵　そう？
ナナ　一人ひとり個性が出てる感じ。
恵　そう言われるとうれしいわー。一人ひとり何を考えとるか、どうやってここまで来たんか、考えながら描いたんよ。
アツト　ちぇー、差がつくな。焦る。
恵　アツトのはアツトのでいいじゃん。
ナナ　そうだよ。あー、白井さんこれでいいって言ってくれるかなー。
アツト　いいんじゃね？　ずいぶん変わったし。おれなんか昨日だよ、白井さんが「思い出したー、看護婦さんがおったー」って電話かけて来て。
恵　似とる似とる。それで書き足してたんじゃ。
アツト　さて今日は何が出て来るかなあ。
恵　こうなるともう楽しみだよね。
ナナ　自虐的快感。
アツト　絵描いてこんなに時間かけたことねえもん。
恵　そうだね。
ナナ　九月末が〆切だよ。間に合うかな。
恵　そうだー、うーん。

ナナ　夏休みの宿題とかやった？
恵　それ言わないで。
アツト　お前もかあ。（うれしい）

岡田入って来る。

アツト　先生、白井さんは。
岡田　白井さんは今日はいらっしゃいません。
恵　来ないんですか？
岡田　脳梗塞の発作を起こして入院されたそうです。
恵・アツト・ナナ　えっ！
ナナ　脳梗塞って、
岡田　症状は軽いんですって。命に別条はないって。おうちの方が連絡くれたの。
恵　良かったー。
岡田　でもしばらくはそちらにはうかがえませんって。

皆ぼう然とする。

ナナ　信じられない、この間あんなに元気だったのに。
アツト　昨日の電話ん時だってピンピンしとったよ。

岡田　発作がおきたのは今朝なんだって。
恵　今朝…。
岡田　申し訳ありませんて、おうちの方恐縮してらした…。こっちが謝らにゃいけんのに。
恵　絵のことで無理させたからですか。
アツト　暑いけえかなあ。
岡田　それもあるかもしれんね。
ナナ　大丈夫ですよね？　白井さん。
岡田　大丈夫だと思う。
恵　お見舞いにいこう。
岡田　ダメダメ、今は安静にしとらんと。
恵　えー。どうしよう、でもこのまま会えんかったら。
アツト　へんなこと言うなや。
恵　だってお祖父ちゃんの時も、お祖父ちゃんの時もすごい元気じゃったけど、倒れてからあっという間じゃったんじゃもん。
ナナ　やめてよ！
岡田　そうよ、おうちの方が大したことはないって言ってらっしゃるんだから、余計な心配しちゃだめ。
ナナ　いつ頃退院できるんですか。
岡田　それはわからないけど、とにかくしばらくは私たちだけで作業を進めないと。

アツト　でも白井さんに見てもらわないとわからないですよ。
ナナ　先に進めないよね。
岡田　出来る限りのことをして、退院されるのを待ちましょう。それしかないでしょう。ね。
ナナ　どうやって選ぶんですか、あっちかこっちか迷った時。今まで全部白井さんに選んでもらってきたのに。
岡田　そこは自分で選んで。
ナナ　そうしてどんどん白井さんの見たものと離れていっちゃったらどうするんですか。絵を描く意味がないじゃないですか。
岡田　……
アツト　なんかとっかかりがあればな。
ナナ　とっかかり？
アツト　他の被爆者の意見聞くとか。

岡田、アツト、ナナ、恵の方を見る。

恵　え、うちのおばあちゃん？
アツト　頼んでくれよ。
恵　おばあちゃんをここに？　ちょっと待って、えー。…微妙なんよ。だってうん十年全然話してこんかったんよ、家族にも。

ナナ　そうだけどさ。
アツト　三人で頼みに行くか。
恵　いやそれはちょっと…。
ナナ　じゃどうすればいいの。
恵　おいおい話すから。
ナナ　おいおいじゃ駄目だって。間に合わないよ。
恵　うーん…。
岡田　ダメもとで、聞いてみてくれる。
恵　…わかりました。

恵、アツト、ナナは自分の絵を見る。暗転

シーン８　恵の家　前場の夕方
八月末。恵が帰宅途中で綾子を見つける。

恵　あ、おばあちゃん。
綾子　あれ、あーよかった、これ持って。
恵　なに？　（受け取り）スイカ。
綾子　あー重かった。うちまで運んでちょうだい。
恵　うん。

綾子　どしたん。
恵　え。
綾子　元気ないじゃないの。
恵　うん。
綾子　学校で何かあったの。
恵　まいったー。
綾子　何が。
恵　白井さん入院しちゃった。
綾子　白井さん？
恵　ほらあの被爆証言の。
綾子　ああ、あんたが絵に描いとる人か。入院したんね。
恵　脳梗塞だって。
綾子　そりゃ大変じゃ。
恵　発作は軽いけ命に別条はないって先生言っとった。
綾子　でも相当な御年じゃろ。
恵　８５。
綾子　ありゃ、ばあちゃんと同じじゃ。
恵　そうなんよ。
綾子　脳梗塞は繰り返すけえね。
恵　そうなの？

綾子　最初は小発作、次は大発作いうこともある。
恵　えー。
綾子　先生は大丈夫て言ったんじゃろ。
恵　そうだけどー。
綾子　なら大丈夫なんよ、きっと。
恵　うちらが無理させたけえかな。
綾子　そんなにしょっちゅう来とったの。
恵　このところ毎週来とった。
綾子　毎日じゃないんじゃろ。
恵　そうだけど。電話したりしてよく話しとったし。
綾子　ほうね。
恵　どうしようー。
綾子　あんたが騒いでもどうもならんでしょ。
恵　そうだけど。じいちゃんのこと思い出した。
綾子　じいちゃんはいきなり大発作じゃったけえね。
恵　うん。
綾子　一度も目覚まさんまま逝ってしもうたのう。
恵　うー。
綾子　大丈夫。人によってそれぞれじゃけ。先生がそう言うんなら。
恵　うん…。でも、絵は出来上がらんかも。

綾子　まだ出来とらんの。
恵　まだまだ。
綾子　でもしょうがなかろう、自分たちでなんとかせにゃ。
恵　無理。うちらじゃあ決められんもん。
綾子　何を。
恵　何もかも。うちらにはわからんのよ。原爆のことは。考えても考えても、調べても調べても、わからんことばっかり。自分がこんなに何も知らないってことを初めて知った。
綾子　そりゃあしょうがなかろう、ピカにおうたことが無いんじゃから。
恵　だから白井さんに聞かないと。細かいことが何もわからんのよ。絵が描けんのよ。でも、でもね。
綾子　ん？
恵　誰かがおってアドバイスしてくれたら描けるかもってみんなが。
綾子　誰かって誰。
恵　たとえば、おばあちゃんとか。
綾子　私が？
恵　そう。
綾子　ダメダメ。被爆体験なんて一人ひとり全部違うんじゃから、その人の代わりなんてできるわけないでしょ。
恵　それはわかっとる。じゃけえおってくれるだけでもいい。それだけでも何か違

うと思う。
綾子　何が。
恵　気持ちが。なんか安心というか。
綾子　ええ？
恵　頑張る気になるというか。お願い。
綾子　ほんな。おるだけで役に立つかいな。
恵　たつよ。絶対。お願いします。
綾子　出来ません。それは。とてもとても。
恵　…だよね。
綾子　ばあちゃんがそう言ったって先生に言いなさい。自分らでなんとかせにゃ。
恵　うん…。こうやって、記憶て消えていくんかな。
綾子　え？
恵　白井さんが死んでしまったら、白井さんの記憶は消えてしまう。
綾子　じゃけえ絵を描いとるんじゃろあんたらが。
恵　そうだけど、細かい所がまだ出来とらんし。冷蔵庫いれとくね。（退場）
綾子　ああ。

恵退場。綾子は見送って考える。暗転。

シーン９　美術室　翌日

キャンバスに向かっている恵、ナナ、アツト。

アツト　やっぱダメだったかあ。
恵　ごめん。
ナナ　別に恵があやまることじゃないじゃん。
恵　７０年黙っとったからなあ。
ナナ　７０年の沈黙。
アツト　すげーな。時間あけてもう一度頼んでみるのもダメか。
恵　駄目っぽい。ただ頼んだだけでも昨日眠れんかったみたいなんよねー。おばあちゃん。
ナナ　そうなの。
恵　お母さんがそう言っとった。
アツト　うーむ。ま、しょうない、先生に頼んで他の人あたってもらおうぜ。証言活動しとる人ならいいんじゃないの。
ナナ　そうだね。
恵　ごめんねー。
アツト　もういいってそれは。あれ。（入り口を見て立ち上がる）

岡田に伴われて綾子入って来る。

恵　おばあちゃん！
綾子　こんにちは。
アツト・ナナ　こんにちは。
岡田　浅野さんのおばあちゃん。わざわざ訪ねて来て下さったの。こちら工藤さん。こっちは飯島くん。二人とも一年で、美術部員です。
綾子　ほうね。恵がいつもお世話になっています。
ナナ　いえ、こちらこそ。
岡田　ごめん、ここへ絵を並べてくれる？

アツト、ナナはイーゼルを動かして絵を並べる。

恵　いつ来たの。
綾子　今さっき。先生とお話してたんよ。
岡田　これが今取り組んでいる原爆の絵です。

綾子は一枚一枚食い入るように見ている。

岡田　いかがですか。
綾子　はあ…ああ、すみません、何か胸に迫って。

岡田　お座りになりますか。椅子お願い。

アツトが椅子を持ってくる。綾子はそれに座る。岡田も椅子を引き寄せて座る。恵は綾子のそばにしゃがむ。

岡田　大丈夫ですか。
恵　ばあちゃん苦しい？
綾子　大丈夫大丈夫。ごめんなさい。ちょっと。平気です平気です。ちょっとびっくりしたもんだから。まあ、ねえ、高校生の人がこんな絵を。私正直いってこんなに立派な絵だとは思わなかったんです。
岡田　そうですか。
綾子　ほんとにこの通りの風景でした。思い出します。迫力があって。
岡田　みんな頑張りましたから。
綾子　ねえ。まあ。恵が描いたのはどれ。
恵　うちのはこれ。
綾子　そうね。まあー、こんなむごい絵を。
岡田　人物に表情がありますでしょう。ここへ来てずいぶん絵が変わってきたんですよ。
綾子　そうですか。これは誰が。
アツト　僕です。

綾子　ほうね。よく描けとる。こんな絵を描いて、怖くなかったですか。
アツト　怖かったです。でも、今は。
綾子　怖くないの。
アツト　絵を完成させんとって、そっちの方が強くなって。
綾子　偉いねえ。ほんとに。これはあなたが。
ナナ　はい。
綾子　私が地御前で見た雲もこんなじゃった。
ナナ　ほんとですか。
綾子　電車に乗っておってね、山の陰に入ったところでピカーっと光って、その後工場まで歩いとる時にね、見た雲がこんな。ようまあ上手に。
恵　工藤さん一番絵がうまいんよ。
ナナ　何言ってんの。
綾子　ほうじゃろうねえ。あんたのはこれは福屋の中。
恵　そう。
綾子　こっちが電車通りか。
恵　そうだって。
綾子　福屋で電車通りがこっちなら、焼け残りの建物が窓から見えとったんじゃないかな。
恵　どんな。
綾子　こっちが広島駅の方じゃろう。福屋の旧館とか、駅の建物とか。あと、ぽつん

ぽつんと電信柱や木が焼け残って立っとるのもあったよ。

恵　わかった。

アツト　僕のはどうですか。

綾子　ねえ、よう描けとる。私もね、８月９日に家に帰りついて、１０日からもう観音中学校の救護所に手伝いに行かされたんですよ。

アツト　そうですか。こんなでしたか。

綾子　この通り。学校の教室といわず廊下といわず下駄箱の前の簀子にまで、足の踏み入れようもないだけ人がひっくり返っとるの。片頬がえぐれて奥歯が見える人やら、片耳が溶けて垂れ下がったひとやら、皮膚がずるむけの人やら、背中一面にガラスが刺さった人やらね。みんな「水、水」て水を欲しがってね。救護といっても薬なんかないから、赤チンキやシッカロールを油で溶いて塗るだけなんですよ。私は軍部から届けられたおむすびを配って歩いたんですが、最初こう一つずつおむすび配ってくでしょ、配り終わって戻ると、さっき配った人がもう死んどる。さっき生きとった人が。で暑いからね、すぐ腐るんよね。だからグランドへね、大きな浅い穴を掘ってね、ポーンポーンて死体を投げてね、昼夜分かたず焼き続けるの。もうほんと生き地獄。

岡田　８月６日の８時１５分はどこにいらしたんですか。

綾子　宮島のちょっとこっちの、地御前を海の方へいったところに兵器工場があって、そこで弾を図るゲージをね、こうしてこうして鑢で削って作ってたんですよ。

岡田　じゃ毎日そこへ通って。

石の音。同心円が現れる。

綾子

そうそう。電車に乗って観音町から橋二つ渡って。原爆の時はね、地御前の二つか三つ手前の停留所で止まったと思ったらガチャガチャガチャーって揺れて、ほんともう死んだかと思った。その前に山の影がピカーっと光ったんです。でまあ電車止まってるから歩いて歩いて工場まで行ったら工場のガラスがぐちゃぐちゃ。仕事にならないから、先生が帰りなさいて。で私たちは国道へ出ました。ほいで市内へ向かって帰ろうと思ったら、もう市内からこう腕の皮がここらへんまでぶら下がってる人が沢山歩いてきてました。裸足で、まあボロボロ。痛くてみんなこうやってるの。（幽霊のポーズ）草津まで来ましたらね、ここから先はもう入れないから、あなた達は親戚でも知人でも他人でも誰でもいいから泊めてもらいなさい言われて、知り合いの農家に泊めてもらいました。なーんと6日の夜、近くの山の上から、天を焦がすだけ火が燃えてる。広島が燃えとる火ですよ。七日の晩も、八日の晩もそう。昼も燃えとるんですけど見えないだけで。それで四日目、九日になってようやく広島に入れるかもしれんていう情報が来て。でまた歩いて歩いて、六日に渡った橋が二つとも落ちてるから、鉄橋をね、下ゴーゴーゴーゴー水が流れとるのを、お母ちゃん、怖い怖い言いながら渡って、天満町の駅まで来ましたらね、まあなんと、三千度四千度の熱風で全部はぎ取られて真っ裸になった人がメザシのようにべたーっと並んで死

んどるんですよ。

アツト　メザシ。

綾子　そう。大概ならこっちとあっちと互い違いになるじゃないですか。それが一方向に並んで。もうほんとに、そうなったら麻痺してね、怖いとか気持ち悪いとかも、超えてしまうの。

岡田　ご家族は。

綾子　母は助かったんですよ。家は潰れましたけどね。弟がやられた。

岡田　お幾つだったんですか。

綾子　7歳です。家の前でね、鶏に餌やってる時にパーッとやられて。ここからここから、半身焼いたんです。私が帰った時は家の前で戸板に寝かされてました。頭が倍になって、目がつぶれて、こう汁が出てね。蛆がわくんですよ、夏ですから。もうほんとに死ぬかと思ったけど、助かったんです。なんとか癒えて、学校行きますでしょ、ケロイドがあるから、小中高と馬鹿にされて馬鹿にされていじめられて。

恵　なんでひどい目に合ったのにその上いじめられるの。

綾子　なんでかねえ。本当にかわいそうだったよ。ほで高校の二年生の時に、授業中もう我慢できなくなって、ぱーっと家に帰ったのね。で先生が追っかけて来て、いろいろ説得しても、絶対もう学校には帰らなかった。だから自分のやりたいことあったんでしょうけど、人が変わったようになって。人に見られない仕事についた。

岡田　見られない仕事。

綾子　私の姉が洋裁教えたの。ミシンを踏むことを教えた。で、屋根裏でミシンをずーっと踏んで、人並みになってね、一時は東京へ出て店をやったりしたんですが、２０代でもう胃癌をやりましてね、結局３６才で亡くなりました。もうほんとに、話せばいっぱい。

恵　じいちゃんは、お祖父ちゃんはどうだったの。

綾子　じいちゃんはねえ、中学校で建物疎開の作業してたの。あの時、班長だったんだけど、寝坊してしまって遅刻したんだって。それで先生に「お前ちょっとこい」って校舎の裏に呼び出されて、説教されてる時に原爆が落ちたんよ。だからじいちゃんだけ校舎の陰になって助かった。

恵　え―…。

綾子　みんなあとは全滅。それだからそういうの見て、逃げて、結局８０過ぎまで生きましたけれども、でもね、定年退職してからは行脚してました。その時の同級生の遺族をね、訪ねて、お参りさせてもらって。

恵　それで旅行しとったん。

綾子　ほうよ。ほうしてみんないろいろな思いを抱えてね、生きてきたんよ。

同心円は消える。間

綾子　やっぱり被爆者は差別がありますから。弟のこともあるし、思い出すだけで辛

くて辛くてね。墓場まで一人で持って行こうと思っておったんですけど、これが原爆の絵を描くいうもんじゃから、これもなんかの縁かもしれんと思ってね。こんな話でもなんかお役に立ちますか。

岡田　それはもう。本当にありがとうございます。

ナナ・アツト　ありがとうございます。

恵　ばあちゃんありがとう。

綾子　こんなでいいか。

恵　いいよ。ばあちゃんが生きとって良かった。

綾子　ほうか。

恵　ばあちゃんが原爆で死んどったら今私はここにはおらんかったんじゃもんね。

綾子　ほうじゃね。

恵　なんか、また少し白井さんの絵が身近になったような気がする。

ナナ　私も。

アツト　おれも。

綾子うなづいている。暗転。

シーン１０　美術室

九月中旬。片づけをしているナナとアツト。恵はまだ絵を描いている。

ナナ　まだ終わらないの。
恵　もう少し。
ナナ　もう来ちゃうよ。
恵　わかってる。もう、焦らさんで。
アツト　焦ろや。
恵　だってー、昨日の晩なんよ、白井さんから電話かかってきたの。
ナナ　思い出したーって？
恵　そう。家族を探しに来とる女の人がおったって。
ナナ　無理に入れなくてもいいって言ったんでしょ。
恵　そうだけど。聞いたらなんとかしたいじゃない。
ナナ　まあね。
アツト　（絵の前に椅子を二つ置いて）これでいいか。
ナナ　いいんじゃない。あー、緊張する。
アツト　お、来たぞ。
恵　引き止めといて！
アツト　え、どうやって。
恵　いいから早く！
アツト　ええー。（外へ出る）
ナナ　白井さんを立たせておくわけ？

恵　あとちょっとだから…。うん、よし。
ナナ　できた？
恵　できた。
ナナ　じゃ入れるよ。
恵　うん。はー…。
ナナ　（袖中で）どうぞ。

岡田に伴われて、白井が杖をついて入って来る。後ろから綾子が付いてくる。

恵　あれ、おばあちゃん。
岡田　私がお呼びしたの。
恵　えー。
ナナ　白井さん、退院おめでとうございます。
恵・アツト　おめでとうございます。
白井　ありがとう。これお土産。
ナナ　あ、レモンケーキだ！
岡田　すみません、お祝いはこちらで用意しなくてはならないのに。
白井　いやいや、絵を描いて下さったのが最大のお祝いですよ。
岡田　どうぞご覧下さい。

白井　それじゃ。

白井はゆっくりと絵に近づき、じっくりと見る。

白井　お、昨日言った女の人がもう入っとる。
恵　今描きあがったばかりなんです。
白井　それはそれは、無理をいってすまんかったねえ、ありがとう。おお、これは。
アツト　こんな感じでいいですか。
白井　いい、いい。いやー、この間見た時より迫力がある。一人一人がよう描けとる。
ああ、この原子雲はまた、生きとるような。不気味な。うん。この色がね。いやー、素晴らしい。
ナナ　ありがとうございます。
白井　先生、こんな。いや、素晴らしい仕事ですよ。ようここまで、見たこともないものをねえ、皆さん苦労したでしょう。大変だったと思います。本当に、ありがとう。私には描けなかった　からねえ。思い出しますよ、本当に。これ見るとねえ。
岡田　じゃ、これで完成ということでよろしいですか。
白井　はい。完成。
恵　わー！
アツト　やったー！

ナナ　良かったー！
岡田　おめでとう。よく頑張ったね。
恵　おばあちゃん、ありがとう。
岡田　浅野さんのお婆さんがいろいろアドバイスして下さって、本当に助かりました。
綾子　私は何も。
白井　そうですか。私が一番肝心な時に倒れてしまってねえ。いやー、ありがとうございました。
綾子　とんてもない。差し出がましいことと思ったんですけれども、孫にせがまれまして。
白井　いやいや、助かりました。
恵　先生ありがとうございます。
ナナ・アツト　ありがとうございます。
岡田　私なんか何もしとらんよ。
綾子　私からもお礼を言います。本当にありがとうございます。
岡田　そんな、生徒が頑張っただけですから。
白井　いや、先生が見守って下さったからできたことですよ。
恵　さあ、お茶しよ、お茶。
綾子　なんですねえ、あんたは。
岡田　一休みなさってください。こちらへどうぞ。
白井　はいはい。（腰かける）

岡田　浅野さんも。
綾子　ありがとうございます。

白井と綾子、腰かける。

綾子　もうお加減はよろしいんですか。
白井　はい、もう。元々ガタが来とるんでね。今回はまあ早く出られて良かったですよ。もうこの絵が気になって気になってね。
岡田　そうでしょう。
白井　早く見たくて、医者の言うことをおとなしく聞いとりました。
岡田　えー。（笑）
白井　でも、絵が出来てしまったら、もうみんなには会えんのかのう。
アツト　そんなことないですよ。
恵　私たち、白井さんがこの絵を使って証言活動をするところが見たいんです。
ナナ　絶対見に行きます。
白井　ほうか。
岡田　だめよ、白井さんはまだ病み上がりなのに無理言っちゃ。
白井　いやいや、そう言われるとじいちゃんもモリモリ元気が出てきたぞ。リハビリを頑張って、また証言活動をするから、必ず聞きに来てよ。
恵・アツト・ナナ　はい！

明かり変化する。皆が正面を向くと、水の音がして、青い同心円が舞台一杯に広がる。

終わり